

# 応用心理学の クロスロード



特集 日本応用心理学会第87回大会報告

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学

14

2022 July

JAAP 日本応用心理学会



# 日本の応用心理学100年を前に

古屋 健 (立正大学)

『クロスロード』をお読みの皆様には、ますますご活躍のことと、お慶び申し上げます。さて、私事、2021年4月より、藤田主一前理事長の後任として第7期日本応用心理学会の理事長を務めることとなりました。それにともない執行部も新旧交代し、この『クロスロード』も本号より新しい顔ぶれで編集されています。新たな企画も始まります。是非、これから展開にご期待いただきたいたいと思います。

さて、2020年に始まった新型コロナウィルスの感染拡大は、姿を変えながら繰り返し世界を席巻し、長い間にわたって広範な社会活動を停滞させてきました。学会活動も例外ではなく、2020年度は当学会も大会や公開シンポジウムの開催を断念せざるをえませんでした。しかし、このような時に応用心理学者が沈黙しているわけにはまいりません。未見の方は是非『クロスロード』の前号13号をご覧下さい。特別企画『コロナ禍時代を考える』と題して幅広い分野の会員からの報告を読むことができます。また、関係各位のご努力により2021年度は学会活動も復活し、Web開催の形式でフルサイズの大会が実現し、対面とリモートのハイブリッド形式で公開シンポジウムも開催することができました。むしろ、大会特別講演や公開シンポジウムなど、Web上での動画配信などを通してこれまで以上に多くの聴衆を集めたかもしれません。学会活動のこれからの方を考える上で非常に示唆に富んだ有意義な試みだったと思います。

思いかえせば、日本応用心理学会はあまたの先達の努力によって今日まで発展してきました。記

録によれば、本学会の前身のひとつである関西応用心理学会の第1回大会が開催されたのは1927(昭和2)年4月のことです。2022年度には95周年を迎えることとなります。また、もうひとつの前身である東京の応用心理学会の第1回大会は1931(昭和6)年6月に開催されています。こちらは今年度が90周年に当たります。そして、1936(昭和11)年4月に開催された東西の学会による第2回合同大会においてはじめて『日本応用心理学会』の名称を使うことが決定されました。今年度はその85周年です。日本に応用心理学の灯がともされてから10年をかけて全国に拡がったことになります(詳しくは学会HPの「沿革と概要」及び「戦前の東西応用心理学会」をご参照ください)。そして今、わたくしたちは日本の応用心理学100年という大きな節目を目前にしています。

日本は創業100年以上の歴史を持つ長寿企業の数が多いという点で世界的に珍しい国であるとされているそうです。もちろん、学会は企業ではありませんが、そこには何か共通の秘訣のようなものがあると思います。私の専門に引きつけて言えば、そのひとつが人を育てる組織風土にあると思っています。学会としても、コロナ禍からの脱却に向けて新しい応用領域に挑戦する心理学者たちを積極的に応援し、若手・中堅会員の活躍の場を広げることで、そのエネルギーを次の100年の飛躍へつなげていけるものと信じています。残念ながら、私の任期は100周年を迎える前に終わりますが、新しい100年のスタートに向けて会員の皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。



古屋 健(ふるや・たけし)／早稲田大学教育学部卒業。群馬大学教育学部助教授・教授を経て、立正大学心理学部教授。博士(心理学)。専門は社会心理学・教育心理学。2017年 第84回大会委員長(於立正大学)。2018～20年度日本応用心理学会副理事長、2021年4月より理事長。

# CONTENTS

[巻頭言]	古屋 健 (立正大学)	1
[CONTENTS]		2
[CROSSROAD ESSAY]	角山 剛 (東京未来大学)	3
[特集] 日本応用心理学会第86回大会報告		5
大会委員長からの報告	松田 浩平 (東北文教大学)	6
大会事務局からの報告	南條 正人 (東北文教大学・仙台大学)	9
大会スタッフからの報告①	花屋 道子 (東北文教大学)	10
大会スタッフからの報告②	軽部 幸浩 (日本大学)	10
研究発表報告①	宮崎 由樹 (福山大学)	11
研究発表報告②	今井 靖雄 (株式会社電腦)	12
研究発表報告③	亀田 凌雅 (帝塚山大学大学院)	13
研究発表報告④	大谷 亮 ((一財)日本自動車研究所)	14
教育発表報告①	井上 裕珠 (日本大学大学院)	14
教育発表報告②	相内 朱里 (日本大学商学部)	15
大会参加者からの報告	佐々木 美智子 (志學館大学・龍桜高等学校)	16
次回大会委員長の挨拶	来田 宣幸 (京都工芸繊維大学)	17
大会企画シンポジウム報告①	北川 公路 (東北文化学園大学)	18
大会企画シンポジウム報告②	佐藤 惠美 (東京富士大学)	19
大会企画シンポジウム報告③	南條 正人 (東北文教大学・仙台大学)	20
自主企画ワークショップ報告①	田中 堅一郎 (日本大学大学院)	21
自主企画ワークショップ報告②	山岡 重行 (聖徳大学)	22
[ホープ登場 クロスロードの星]		23
学位取りました	小原 宏基 (湊川短期大学)	23
学会賞(論文賞)	田中 圭 (聖徳大学)	23
学会賞(奨励賞)	前田 枫 (立教大学)	24
学会賞受賞論文へのコメント①	古谷 嘉一郎 (北海学園大学)	25
学会賞受賞論文へのコメント②	谷田 林士 (大正大学)	26
[大学探訪]		27
①神戸大学学院海事科学研究科国際海事研究センター	渕 真輝 (神戸大学海事科学部)	27
②中京大学心理学部	松本 友一郎 (中京大学心理学部)	29
③関西国際大学心理学部	板山 昂 (関西国際大学)	30
[齊藤勇記念出版賞受賞]		31
『悪いヤツらは何を考えているのか:ゼロからわかる犯罪心理学入門』	桐生 正幸 (東洋大学)	31
[コラム&トピックス]		32
雑学心理学	森下 雄輔 (帝塚山大学)	32
心理学検定について	小林 剛史 (文京学院大学)	33
常任理事会通信		35
国際交流	川本 利恵子	35
斎藤勇記念出版賞選考	川本 利恵子	35
機関誌編集	上瀬 由美子	36
学会活性・研究支援	田中 堅一郎	36
広報	谷口 淳一	39
企画	桐生 正幸	39
倫理	田中 真介	40
事務局だより	軽部 幸浩	41
学会賞選考	木村 友昭	42
学会史編纂	古屋 健・軽部 幸浩・藤田 主一	43
学会だより		44
2021年度日本応用心理学会学会賞		44
入会申込書		45
「応用心理士」のご案内	小林 剛史	46
「応用心理士」資格認定申請のご案内		47
編集後記		48



(東京未来大学)

### ■産業心理学への関心

私が大学に入ったのは1970年でしたが、1960年代後半のいわゆる大学紛争は当時高校にも波及しており、私が通っていた神奈川県の高校でも、授業をつぶしての全学集会や校外デモ、定期試験ボイコットなど、高校紛争と呼ばれるさまざまな事態が起き、3年生だった私もその波に翻弄されていました。

学生紛争の中では、さまざまな学問分野が批判にさらされ、特に産業と学問が親密な関係を持つことが両者の癒着であるとされて、どのようなものであれ「产学協同」は唾棄すべきものとして、厳しく糾弾されていました。私はその頃あることがきっかけで心理学に興味をもっていたのですが、この産業と学問の関係ということを心理学について考えている中で、産業心理学なるものがあることを知り、当時はまだ少なかったのですが、その分野が学べる大学の心理学科に進みました。入学した時点で、当人も意識しないうちにすでに心理学の応用畑に足を踏み入れようとしていたのかもしれません。ちなみに、2016年に国家資格化された公認心理師では、産業・組織心理学が必須の養成科目になり、現在多くの大学で産業・組織心理学の授業が開講されています。しかし私が入学した頃は、産業・組織心理学という分野名称もまだなく、一部の大学で産業心理学が開講されているという状況でした。

### ■ワーク・モチベーション研究のきっかけ

私は、働くということへの関心からワーク・モチベーションを研究テーマとしてきましたが、私が研究の道に入った1970年代は、まだモチベーションという言葉も今ほどポピュラーではなく、仕事場面ではモラール (morale) という語の方が一般に使われていました。自身も、一般社団法人日本労務研究会が開発したNRK方式モラールサーベイ（「従業員意見調査」）を用いた調査研究や、労働省（当時）方式モラールサーベイの改定作業に携わったりもしました。ただ、モラール概念は、基本的には集団への帰属に関する個人の態度や満

足感を表すものであり、目標達成に向かう心理的な活力を扱うモチベーションとは、必ずしも同義ではありません。ワーク・モチベーションへの関心は、組織行動に关心が向けられるようになるとともに広がっていったように思います。

私自身は、恩師の一人である松井賛夫先生（立教大学名誉教授 故人）と一緒にE.A.ロックとG.P.レイサムによる“Goal-setting: A motivational technique that works”（邦訳『目標が人を動かす』ダイヤモンド社 1984）を翻訳したのがきっかけで、松井先生の許で目標設定理論の研究を手がけることになりました。この訳書は原著と同年に発行され、日本における同理論の紹介には松井先生とともにだいぶお手伝いができたのではないかと思っています。

松井先生は研究を通じてロック教授と親交があり、この翻訳も原著のゲラの段階で版権をとったのですが、そうしたご縁でロック教授からのお誘いがあり、メリーランド大学でのワーク・モチベーションに関するワークショップに招かれました。松井先生と私、松井研究室にフィリピンから留学中のM.L.U.オンラタコさんの3人で参加し、ロック教授のプール付の邸宅に招かれて、広い庭でご夫妻からバーベキューをご馳走になったこともよい思い出です（ロック教授の水泳パンツを拝借してプールで泳いだのは、世界の産業・組織心理学者の中でもおそらく私だけでしょう）。



1986年米国メリーランド大学訪問時に近郊レストランにて  
前列左から E.ロック夫人、M.オンラタコさん、E.フライシュマン夫人、M.エレツ教授 後列左から E.ロック教授、E.フライシュマン教授、J.コマキ教授、筆者、松井賛夫教授

1996年には、立教大学で開催された日本心理学会第60回大会にロック教授をお招きし、特別講演をお願いしました。レイサム教授との提唱になる、「ワーク・モチベーションの世界ではよく知られた「高業績サイクル(high-performance cycle)モデル」もこの講演の中で詳しく説明されました。

## ■ 研究の広がり

こうした中で、私は目標設定理論研究以外にも、松井先生との共同でワーク・モチベーションに関する研究を手がけるようになり、その後加わった都築幸恵先生（現成城大学教授）との3人の研究チームが、松井先生が2016年に94歳直前で急逝なさるまで（亡くなるまで現役研究者でした）続きました。

3人による研究では、初期にはモチベーションを阻害する要因としてのセクシュアル・ハラスメント（以下セクハラ）やいじめの研究があります。セクハラに関する研究を行ったのは90年代の前半でしたが、当時はようやく日本でも、働く女性に深刻な心身被害を与えるものとしてセクハラ問題が注目されてきた頃で、多くの企業ではその対応にまだ五里霧中の状況でした。

そこで私たちは、ある財団の紹介で、セクハラ対策に先進的に取り組んでいるという企業をいくつか紹介してもらい、匿名調査と結果の詳細な報告を条件に研究協力を依頼したのですが、どの企業からも断られてしまいました。曰く従業員に調査票を配布するなどによって「寝た子を起こす」、曰く結果が思わしくない場合には改善取り組みを進めている担当者の責任が問われる、曰く結果が外部に漏れた場合に「言ってるわりにはこの程度か」という評価になりかねない—。どの会社も窓口は腰の引けた対応でしたが、当時はほとんどの企業で担当者が男性であったこととも関係していたかもしれません。

私たちの研究は、アメリカで提唱された理論モデルや先行研究に基づいて計画したものでしたが、こうした回答する側にとってデリケートな問題のデータを実際の仕事場面で収集することの難しさ

を、このときあらためて感じました。ちなみに、私たちの最初の研究は1995年に*Journal of Vocational Behavior*に掲載されましたが、セクハラに関する日本発の心理学的研究としては、私たちの論文が海外研究誌に掲載された初めての、あるいはかなり初期の論文だったと思います。

## ■ 実践に役立てる面白さ

その後も、女性のキャリア形成に及ぼす要因、Person-Organization Fit (P-O fit) と業績との関係、上司-部下間の信頼性とコミットメントの関係、企業不祥事に及ぼす心理的要因、楽観的思考傾向が業績に及ぼす影響等々、3人で多くのテーマにわたる研究を手がけました。私たちの研究は、どちらかといえば理論を現場で確かめ応用につなげるというスタンスが多かったのですが、3人の見解が合わず、激論になったり結局没にした研究もったりなど、長い間の共同研究ではいろいろな経験もしました。調査対象がなかなか見つかず苦労することもありました。こうして並べてみると、ずいぶんと手を広げた感がありますが、いずれも元にあるのはワーク・モチベーションへのアプローチであり、ワーク・モチベーションをさまざまな視点で俎板の上に載せたということで、その点ではかなり応用的な色合いの濃いこれまでの研究生活であったといえるかもしれません。

産業・組織心理学は応用色の強い分野ですが、実際に起こっている問題を心理学の視点からどう解決し、あるいは支援することができるかという点では、他の心理学分野と変わりはありません。基本にあるのは科学的な検証に耐えうる考え方と方法であり、それを組織・職場の問題に応用し、実践的に役立てていくところに、この分野の面白味があるのだと思っています。

---

角山 剛 (かくやま・たかし) / 1951年生。立教大学文学部心理学科卒業。同大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、東京未来大学学長／元産業・組織心理学会会長、現在名誉会員・常任顧問。「産業・組織」(新曜社)、「組織行動の心理学」(北大路書房)など。

**日本応用心理学会  
第87回大会報告  
東北文教大学**



# 第87回大会を終えて

松田 浩平  
(東北文教大学)



2019年に日本大学商学部で開催された日本応用心理学会第86回総会で第87回大会が京都工芸繊維大学と決定され、その次の大会として第88回大会として山形市の東北文教大学での開催が推挙されました。これまで、著名な先生方が大会長をなさってきた伝統ある学会の大会長に推挙されその責任の重さを感じながらも、まだ実感が湧かないままの私は、来年は京都に行って第87回大会での来田宣幸先生のご様子を伺ってから準備委員会を立ち上げようなどと考えていました。

ところが、2019年当初は海外のことだろうと高を括っておりましたが、皆様もご存じの通り2020年初頭から日本国内でも新型コロナウィルス(SARS-CoV-2)による感染症(COVID-19)が確認されるようになりました。さらに、2020年2月26日に政府より“イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ”が発せられました(厚生労働省 2020年2月20日)。これを受けて全国的に各種のイベントが相次いで中止されることになりました。これを受けて心理学界でも、同年3月2~4日に大阪国際会議場で開催が予定されていた日本発達心理学会第81回大会が「大会は成立したものとするが、開催期間に会場には参集しない」と決定されました。まだこの段階では、2021年には対面大会が開催できるであろうという一縷の望みを託しつつ準備を進めることとしました。

第1回準備委員会を2020年7月30日(木)東北文教大学で開催し、事務局長の南條正人先生はじめ学内より花屋道子先生、永盛善博先生、福田真一先生、中俣友子先生、三道なぎさ先生と高梨友也先生という7名ものご協力がいただけました。さらに学外より東北文化学園大学の北川公路先

生、東京富士大学大学院の佐藤恵美先生、東北公益文科大学の渡辺伸子先生に学外委員をお引き受けいただけ準備委員会を立ち上げることができました。その段階では、学外委員の先生方には、テレワークまたはオンライン会議で参加していただくこととしてオンライン開催も考慮に入れながら対面大会を前提に準備を進めて参りました。ところが、同日の日本応用心理学会でも2020年7月10日に大会中止の代替措置が決定され本学会ホームページで公開されました。それに関連し、いったん京都工芸繊維大学で開催予定の第87回(来田宣幸大会委員長)を中止とし、東北文教大学での第88回大会を第87回大会として開催することが決定されました。さらに2021年の東北文教大学での大会(混乱しそうですが、以下87回大会と統一します)は、昨年度の大会が中止となったため如何なる方法であっても開催することが当時の藤田主一理事長の堅固なリーダーシップのもとで決定されました。日本応用心理学会としては初めてのWebによる会員総会が2020年9月5日に開催され、公式に東北文教大学が第87回大会を担当することが報告されました。その頃になるとCOVID-19の状況は悪化するいっぽうでしたが、翌年(2021年)には終息するかもしれないとの期待を心に秘めて、2020年10月15日の第2回準備委員会では委員の先生方の役割分担などを決めました。また、対面大会への一縷の望みを託し、一般財団法人山形コンベンションビューローの支援を受けることとしました。2020年11月26日の準備委員会では、大会の開催方法や発表申し込みの締め切りについて討論しました。また、第86回大会で採用された教育セッションを拡大し、応用心理学の普及のため

に教員の指導を条件に高校生も参加できるように決定しました。12月17日の第4回準備委員会では、学外委員の先生方にメールによるテレワークに加えて、Webによるオンライン会議でご参加頂くことができました。年が明けて2021年になるとCOVID-19は、ますます状況が悪化しましたが、対面会議形式で準備しつつオンライン開催も視野に入れて準備の方向性を切り替えました。

2021年4月17日に新理事長の古屋健先生のもと2021年度第1回常任理事会でオンライン開催とすることが決定されました。この席で、すでにWeb開催を覚悟していましたので、常任理事会前の3月中旬に、日本応用心理学会事務局長としてご多忙であることはご承知の上で日本大学の軽部幸浩先生に哀願しましたところ快く大会準備委員として加わって頂くことができました。さらに常任理事会の席上で東洋大学の桐生正幸先生からは大会アドバイザーへの快諾を頂きました。特に軽部先生には、大会Webサイトやポスター発表Webサイトなどを作成頂けることになり、日本応用心理学会初のオンライン大会で準備することになりました。また、東北文教大学の大江篤志先生が赴任され大会準備委員会監事としてご意見番をお願いすることができました。そこから準備委員会では、大会テーマ、特別講演、大会企画シンポジウムなどを巡り議論を重ねました。さらに参加申し込みや大学学部生と高校生は予約参加では無料とすることを決定しました。話の発端は、当日参加の費用についてから始まり、Web開催では何をもって当日参加と見なすのか、ポスター発表についてどの状況で発表完了と見なすかなど様々な項目について準備委員の先生方からご意見を頂くことができました。また、技術的な問題は日本応用心理学会事務局長の軽部幸浩先生より多大なアドバイスと大会Webサイトの設計と構築をお願いすることなどでなんとか準備に向かって進むことができました。これについては軽部幸浩先生の「学会史上、初のオンライン大会」に詳しく記載されています。

このように多くの先生からご厚意とご協力を

頂けたことで、次のように準備を進めることとしました。特別講演はあらかじめ録画して配信することとしました。さらに、大会企画シンポジウム、自主企画ワークショップと口頭発表はWeb会議システム（Zoom）を利用して開催することとしました。問題になったのはポスター発表のあつかいで、2010年にメルボルンで開催されたICAP 2010 (The 27th International Congress of Applied Psychology) でのe-poster方式では投稿されたポスターを会場で閲覧して質問はe-mailで行う形式だったのですが、全く盛り上がりに欠けて参加感が得られなかつたのを思い出しました。いっぽう2019年にモスクワで対面開催されたThe 16th European Congress of Psychologyではポスターが会場内至る所に設置されたモニタにスライドショーで掲示され、発表者は所定の時間にポスターをモニタに映して口頭発表する形式などの経験から、軽部先生にお願いしてSNSのタイムライン方式ではどうだろうかと提案したところ瞬く間にフォームを作成頂き感謝する以前に驚愕して危うくお礼を言うのを忘れそうになったのを思い出します。

大会案内では、日本応用心理学会としては初めての非対面大会になり費用などの見当がつかず不安でした。大会当日のWeb画面の運用は創文印刷工業様に依頼し、特別講演は事前録画によるOn demand / Off-Timeの動画配信とし、Web Meeting / On Timeで開催される会員総会、大会企画シンポジウム4演題、自主企画ワークショップ2演題と3セッションの口頭発表を2日間の大会が1画面で収まるようプログラムを調整しました。ポスターセッションは、On demand / Off-TimeとしSNSのように発表ポスターに参加者がコメントをつけて発表者と質疑応答ができるようになりました。大会期間は2021年8月28日～29日でしたが、On demand / Off-Timeに対応するためWeb会期として8月28日～9月26日までを設定しました。

会場からの配信がうまく行くかどうか心配でしたが、大会前日の理事会のために、理事長の古屋

# 日本応用心理学会 第87回大会報告

健先生、副理事長の田中真介先生と事務局長の輕部幸浩先生に東北文教大学までお越しいただくことができました。大会前日の理事会では、理事の先生方にはご迷惑をおかけしながらも、結果的にZoom配信のテストをさせていただくことができました。すでにWebによるオンライン大会を開催した、日本心理学会第84回大会（東洋大学）や本来なら2020年にプラハで開催予定だった国際心理学会（The 32th International Congress of Psychology）が2021年7月にWeb Virtualで開催され私もWebでポスター発表した経験などを活かすことができたと思います。

本来なら東北文教大学のスタッフはじめ準備委員一同で、皆様をお迎えして、百花齊放、顔と顔をつきあわせて応用心理学について語り合いつつ、山形のお酒や料理を味わって頂きたかったのですが、2021年度大会はCOVID-19の猖獗により本学会初のWeb開催となりました。しかし、会員の皆様のご理解とご協力並びに、理事長はじめ常任理事や理事の先生方から多大なご配慮とご協力を頂きながら大会を終えられたことを深く感謝申し上げます。今回のWeb大会の経験から得られた私見ですが1) 現地に行かなくても参加できる(院生は旅費負担が大きい)、2) ポスター発表が手軽(大判印刷をしなくてよい)、3) 大会開催コストを低減できる(ただし参加感は薄れます)などをはじめ多くの利点も見いだすことができました。

本来ならWeb会期の最終日に大会委員長からのメッセージをお送りしたいと考えておりましたが、私が出血性十二指腸潰瘍による敗血症と急性腎不全のため9月25日から10月15日まで集中治療室を含む入院となってしまい大会運営の最終段階の庶務につきましては、大会準備委員の皆様のご尽力で終えられたことを、この場をお借りして深く感謝の意を表します。最後に、第87回大会の開催にあたりまして会場の提供をはじめ快くご協力頂いた学長須賀一好先生をはじめとする東北文教大学の皆様と、大会企画シンポジウムにご登壇頂いた先生方に御礼申し上げます。

## 参考資料

- 厚生労働省 2020年2月20日 イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage\\_00002.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_00002.html) 2021年12月21日閲覧
- 日本応用心理学会 大会中止の代替措置 <https://j-aap.jp/?p=10719> 2020年7月11日閲覧



大会ホームページのスクリーンショット



大会本部にて 理事会ならびに会員総会を中継するための演壇

---

松田 浩平(まつだ・こうへい)／1956年福岡県生まれ  
東北文教大学教授、同附属図書館長 日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得。主な担当科目、人格心理学、教育心理学、心理測定法、心理学実験。応用心理士

# 第87回大会開催を振り返って

大会事務局長：南條 正人  
(東北文教大学 現：仙台大学)



8月28日（土）・29日（日）の本会期および10月10日（日）までのWeb会期では多くの皆さまにご参集いただき、誠にありがとうございました。第87回大会事務局の至らぬ点もあったかと思いますが、日本応用心理学会としては初めてのオンライン開催を無事に終えることができたのは、会員並びにご参集いただいた皆さまのご協力によるものと感謝申し上げます。

第87回大会の開催校が東北文教大学に決定した際、本学の会員は松田浩平先生と私の2名のみ（現在は4名）ということから、必然的に大会事務局長を仰せつかり、不安しかありませんでした。そのような中、学外から東北文化学園大学の北川公路先生、東京富士大学の佐藤恵美先生、東北公益文科大学の渡辺伸子先生には準備委員をお引き受けいただき、さらには大会企画シンポジウムを企画していただいたこと、感謝申し上げます。また、第87回大会は対面開催とオンライン開催の両面で検討していた中、オンライン開催に決定した際には、大会Webサイト・申し込みサイト・発表サイト等をご作成いただいた軽部幸浩先生には、感謝の言葉しかありません。私自身これまで対面開催の学会を運営した経験はあったものの、オンライン開催の学会大会の運営は初めてだったため、多くの場面でご教示いただきました。誠にありがとうございました。

学会事務局であります株式会社国際ビジネス研究センターの吉廣麻美様はじめ職員の皆さまには、準備委員のオンライン会議にもご参加いただき、大会準備から大会論文集発刊までご丁寧にご対応いただきました。

本会期中、理事長の古屋健先生、副理事長の田

中真介先生、事務局長の軽部幸浩先生には、お忙しい中、大会本部へお越しいただきました。先生方のお心遣いが準備委員の安心感に繋がり、大会を運営することができました。

日本大学商学部で開催された前回大会では、初めて学部生の教育発表が行われ、それを本大会でも引き継ぐことができました。日本大学の時田ゼミナール、井上ゼミナールの学生の皆さん、素晴らしい発表ありがとうございました。

最後に、心理学を専門としない者が、大会事務局長というお役目をいただき、貴重な経験をさせていただいたこと、お礼申し上げます。

---

南條 正人(なんじょう・まさと)／1977年 宮城県生まれ、東北福祉大学社会福祉学部社会福祉学科卒業後、一般企業に勤務。退職後進学し、仙台大学大学院スポーツ科学研究科健康福祉領域修了。東北文教大学短期大学部・東北文教大学准教授を経て、現在は仙台大学体育学部健康福祉学科准教授。

## アナログ準備委員の オンライン大会奮戦記

花屋 道子

(東北文教大学〔大会副委員長〕)



日本応用心理学会第87回大会をお受けした時点では、みなさまに山形の地にお運びいただき、良い時間をお過ごしいただけるよう精一杯努める所存でおりました。しかしながら新型コロナウィルス感染拡大にともない、さまざまな開催方式が検討されたものの、ついに完全オンライン開催と決まったのは、4月も下旬になってからのことでした。各地にいらっしゃる準備委員の先生方との会議もオンライン、オンライン大会をサポートする業者との打合せもオンラインと、なんとも手応えのない大会準備が進んでいきました。大会会期中も、オンラインサポートなので業者が会場に来るでもなし、掲載コンテンツの不具合を指摘したり修正を依頼したりするのもメールでの連絡といったふうで、何の賑わいも味気もなく、何もかもが作り事のように感じられる中、理事長の古屋健先生、副理事長の田中真介先生、事務局長の軽部幸浩先生が大会本部までお運びくださいましたことは、本当にありがたいことでした。

手応えのない不思議な大会ではありましたが、準備委員会内ではドラマが全くないわけでもありませんでした。首都圏では、教員が職場である大学への入場を制限されるケースもあると聞きますが、本学は学内に検査対象者が出ていた際、一時的に大学を閉鎖した以外、会議等はほとんど対面式で行われています。そのような文化のある中で、基調講演を依頼していた本学学長須賀一好先生に、オンライン配信となる基調講演の事前収録を引き受けてもらうのは少しだけハードルの高いことでした。須賀先生にどのようにお伝えするか、もう一人の大会副委員長である永盛善博先生とよく相談し、「TV放映されている放送大学の授業のイ

メージ」と説明し、本学の美術担当の篠永洋先生を映像デザイナーとして既にスカウト済みであること、本学図書館の一隅にTVモニター2台、カメラ4台、その他音声マイクを複数設営した、本格的な撮影を準備していることをお話ししました。幸い、須賀先生も興味を示してくださいって、無事に収録を終えることができましたが、撮影の最中に直上の教室で机の入れ替えが始まり、それを制止するために足音を忍ばせつつ現地に走ったことなど、今となっては良い思い出です。このようにきわめて特別な時期に大会をお受けしたこと、きっといつまでも記憶に残ることと思います。

花屋 道子(はなや・みちこ)／東北大学文学研究科心理学専攻博士前期修了。本来の専門は認知心理学だが、学生相談や学校カウンセリングなどの臨床業務が増え、臨床心理士養成にも携わる中で、臨床心理学初学者の発達研究なども行うようになった。弘前大学教育研究院人文社会・教育学系教授を経て、現在は東北文教大学人間科学部教授、人間関係学科長。

## 学会史上、 初のオンライン大会

軽部 幸浩

(日本大学)



諸般の事情により、2011年から学会公式Webサイトを作成しメンテナンスしてきました。また2018年から学会事務委託業者の変更にともない、第85回大会(大阪大学)、第86回大会(日本大学)と2大会続けて大会サイトを構築することになりました。

今年こそはゆっくりと学会大会発表を楽しめると思っていましたが、突然2021年3月、大会準備委員会委員長の松田浩平先生より、「大会準備委員会に加わって、大会Webサイトを作成してもらえないか?」という連絡が入りました。過去2大会のときはもっと早くから話が出ていて、十分に

準備する期間がありましたが、今回は時間的にも逼迫していたため、大会サイトをまずは公開してから適宜コンテンツを充実させるということで進めることを了承してもらい、2021年4月7日に公開しました。

さらに日本応用心理学会史上、初の試みとしてオンライン大会にて開催されることが、2021年4月の第1回常任理事会にて正式決定しました。大会Webサイトでは、大会申し込み、大会発表原稿受付、大会コンテンツの掲載の作成という一連の作業があります。そして今回はオンライン大会ということで、口頭発表、ポスター発表はもとより、自主企画ワークショップ、大会企画の特別講演・シンポジウムまでもオンラインで行なういう、とんでもない状況となりました。

本来ならば、大会Webサイトのみ構築することでよかったことが、大会発表サイトまでということになり、「これって、業者であれば、別契約ですね」というほどの作業内容に膨れ上りました。また、大会発表サイトでは、発表者と参加者で質疑応答のコミュニケーションが取れるようになるための仕組み、各発表アクセス数の集計等を用意する必要がありました。当学会初めての試みとしてのオンライン大会ですから、「できませんでした」は言えません。なんとか間に合わすことができた大会Webサイト、大会発表サイトを利用して、無事に第87回大会が開催できましたことをうれしく思っています。

最後に、今回のオンライン大会を振り返ってみた個人的な感想を書かせてもらいます。今後COVID-19が終息する、終息しないにかかわらずオンライン大会は残していくがいいと感じました。対面大会には対面大会のいいところがあります。また、オンライン大会はオンライン大会ゆえのいいところがあります。それは、物理的距離を感じることなく、学会大会に参加ができることです。生の声は聞こえないにせよ、発表がある一定期間掲載しているため時間的な制約がありません。賛否両論ございましょうが、将来的には日本応用心理学会大会は、年2回大会開催として、

1回はオンライン大会、もう1回は対面大会ということも可能であると思っています。

そこで、最後に会員の皆さんへお願いがございます。学会サイトや大会サイトの構築にご興味がある方、ご協力くださってもらえる方はおられませんでしょうか？ ご連絡をお待ちしております。

**輕部 幸浩**（かるべ・ゆきひろ）／1963年、東京生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は、教育心理学、精神生理学。応用心理士。現在、湘南医療大学に勤務。

## 研究発表を終えて

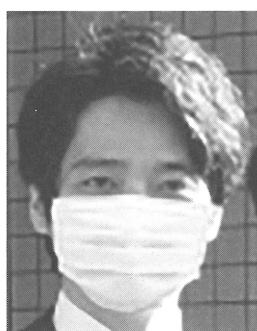
**宮崎 由樹**

（福山大学）



福山大学人間文化学部心理学科の宮崎由樹と申します。このたび、第87回大会について振り返る機会をいただきましたこと、広報委員会の谷口淳一先生、森泉慎吾先生に感謝申し上げます。

私は口頭発表のセッションにて、「不織布マスク着用による表情誤認と透明マスク着用によるその改善」というタイトルで、北海道大学およびユニ・チャーム株式会社との共同研究を紹介させて



衛生マスク（左）と透明なマスク（右）の着用例：衛生マスク着用画像の方が表情の判断が難しかったり、表情の強度が低く見えたりしないでしょうか？

いただきました。現在は外出時の衛生マスクの着用が常態化しましたが、それによって他人の表情を読み取ることが難しくなってしまいました。本研究では、こうした衛生マスク着用にともなう副作用を、透明なマスク（uniccharm 顔がみえマスク）の活用によって解消できることを示しました。私たちの研究発表に対して、諸先生からいただいたご助言は大変有益なものが多く、論文として本発表をまとめるにあたり、非常に役立ちました。おかげさまで、本研究は学術誌に採択されました（Miyazaki et al., 2022, i-Perception誌）。

自分自身の発表だけではなく「これから教育、産業、介護、保育、そしてライフスタイルを考える」をテーマとして開催された87回大会は、ポスト・コロナ社会において、心理学の研究が、どのように社会とつながり・どう貢献できるのかを思い巡らす機会ともなりました。また、大会企画シンポジウムの1つの「応用心理学とキャリアデザイン～学びを活かして働くために～（司会：渡辺伸子先生、話題提供：伊藤昌子先生、藤本吟藏先生）」において、社会における心理学の実践例を拝見/拝聴することが出来たことも、心理学の基礎・応用研究を進める私にとっては非常に得難い時間だったと思います。

最後になりましたが、大会委員長の松田浩平先生、大会事務局長の南條正人先生をはじめとして、本大会の開催にご尽力いただいた準備委員会の皆様に感謝申し上げます。次回の大会が対面での開催になるのか、引き続きオンラインでの開催になるのか、現時点では分かりませんが、応用心理学会におけるファーストペンギンとして、大会のオンライン開催の前例・今後の方向性を示してくださったことは、応用心理学会全体に資するもので非常に大きな貢献です。誠にありがとうございました。

---

**宮崎 由樹** (みやざき・ゆうき) / 首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得退学。博士 (心理学)。中京大学心理学部助教などを経て、現在は福山大学人間文化学部心理学科准教授。専門は認知心理学・応用心理学。

## 研究発表を終えて

**今井 靖雄**  
(株式会社電脳)



近年、我が国でも高齢化が進んでいることから、免許保有者全体における高齢ドライバー（65歳以上）の割合も23.3%（警察庁, 2020）と増加しています。そして、他の年齢層と比較して、高齢ドライバーの交通事故率が高いことも示されています。そのため、交通社会の安全性を考えると、高齢ドライバーの免許更新の判断基準は、他の年齢層のドライバーより慎重かつ明確であることが必要と考えられます。しかし、高齢ドライバーの運転能力は経験や認知症の影響によって大きく異なります。また、高齢であることから縦断的な研究は少なく、実際の運転能力の把握は難しいのが現状でした。

そこで私達の研究では、十分な認知機能を有した高齢ドライバーにおけるMMSE（認知機能）、「運転に対する意識や習慣」と「指導員による運転評価」を測定し、それらの経年変化を検証しました。その結果、MMSEや運転に対する意識や習慣に経年変化がほぼ見られなかったにもかかわらず、運転パフォーマンスの低下の影響が示されました。この結果から、免許更新可能な高齢ドライバーであっても、運転パフォーマンスの低下を回避するための運転訓練プログラムを高齢者講習などに取り入れる必要性を感じました。これらの内容をこの度、「高齢ドライバーの運転行動の縦断的研究—意識と認知機能の観点から—」という研究にまとめ、発表をさせていただきました。

今回のウェブ発表は私にとって初めての経験であり、大変勉強になりました。ウェブ発表では前もってスライド一枚一枚に音声を吹き込んでおく必要があったのですが、吹き込み作業が不慣れで試行錯誤したため、時間がかかってしまいました。スライドのアニメと音声を合わせましたが、吹き

込み終わった後に音声やアニメの変更があり、作り直すことも度々ありました。

このような苦労もありましたが、他の先生方の優れた研究発表を拝見しまして、自身の不甲斐なさを感じるとともに、研究への熱意を分けていただいたような気持ちになり、良い刺激になったと感じています。

今回の大会はコロナ禍の開催のため、他の先生からは“研究ができない”というお話をお聞きしていました。そんな中、私が学会発表できたことはひとえに多くの人の支えがあったからと感じております。この場をお借りしまして、支えてくださった皆様にお礼申し上げます。

今後も評価を受けられますよう精進いたしますので、何卒よろしくお願ひいたします。

**今井 靖雄 (いまい・やすお) / 株式会社電腦** 専門は交通心理学。運転者の攻撃行動とその抑制、および認知機能と運転パフォーマンスの関連について研究している。

## 研究発表を終えて

**亀田 凌雅**  
(帝塚山大学大学院)



私が日本応用心理学会にて初めて発表したのは、2019年の第86回大会（日本大学商学部）でした。当時、私は修士課程1年で、「学会」の経験が全くなく、肩に力が入ったのを覚えています。前年の経験も踏まえ「翌年も発表を」と息巻いていたのですが、2020年はCOVID-19の感染拡大により、大会は中止となってしまいました。特別措置の論文集への投稿をし、発表の場を得たのは幸いででしたが、やはり大会に参加するというものとは異なるものだったと思います。

そして2021年。第87回大会のWeb開催が決ま

りました。私は修士課程を修了し、大学院の研究生として今大会での発表をすることになりました。交流については、社会情勢を踏まえ致し方なかつたですが、やはり対面学会ほど密な交流とはならなかつたという感覚があったのは否定できません。それでも、私のような経験の浅い者にとって、学外の先生方にご意見をいただける機会はそう多くありません。私のような若輩の発表にコメントを頂けるのだろうかといった不安もありましたが、コメントでのリアクションを頂けたことは大変な励みとなりました。また、大会参加におけるアクセスのやすさは非常にありがたい限りでした。会期にゆとりがあったことと含めて、いつも以上に多くの先生方の研究に触れることができ、多くの刺激を得られる大会であったと思います。

私が今回発表させていただいたのは、「対人支援ボランティア場面でのストレッサーについての研究」というテーマでした。その中で、バーンアウトを予防する手立ての一つとして他者からのサポートの要因を挙げています。活動への参加動機にはありますが、他者からのフィードバックなど、人から人に与えられる「言葉」というのは効果的なのだろうという結果でした。こうした「言葉」というのは私のテーマである対人支援ボランティアに限らず、研究活動においても重要なのではないかと思います。学内の先生にご教授いただける機会は勿論ながら、やはり学会の場で頂ける沢山の「言葉」からは学ぶことが多いです。コロナ禍を経て、社会の流れがどのようになるのかは未知数な部分がありますが、どのような形であれ、今後も積極的に学びの場に参加して、たくさんの「言葉」を頂けるように精進しようと思います。

最後にはなりますが、このような貴重な振り返りの機会をいただき、大変感謝申し上げます。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

**亀田 凌雅 (かめだ・りょうが) / 大阪府出身** 2021年 帝塚山大学より修士（心理学）取得。現在、同大学院にて大学院生として在籍しているほか、奈良市にて心理職として勤務。研究テーマは対人支援ボランティア。

## 研究発表を終えて

大 谷 亮  
((一財)日本自動車研究所)



はじめに、コロナ禍の不安定な状況の中、有意義な情報交換の場をご提供いただき、第87回大会事務局および関係者皆様に厚くお礼申し上げます。

第87回大会では、「道路横断行動に関する児童の特徴の年度差」というタイトルで発表いたしました。発表内容は、2019年度に児童を対象にして実施したインタビュー調査の追試を2020年度に行ない、道路方法の特徴に関する結果の年度差を調べるものでした。調査の結果、道路の横断場所といった知識に関する特性は年度差がみられた一方、1年生では空間的視点取得が困難といった結果が、両年度ともに観察されました。この結果から、発達的に固有な特徴と、年度により変化する特徴に配慮して、交通安全教育を実施することが重要と考察しました。

また、今回の発表では、追試研究の重要性を皆様と共有したいという意図もありました。現場で調査を実施する際には、多種多様な要因が介在するため、剩余変数を厳密に統制して、追試を行うことは困難な場合が多いです。また、2ヵ年連続して同じ方法の調査を行うと、新規性や独創性がないといった評価を受けることがあります。さらに、人間という変動性の高い対象を扱っているため、追試を行っても結果の再現率が低いこともあります。追試の意味に疑問をもたれる方もいるかもしれません。

同じ調査を異なる年度で繰り返すことで、子どもの発達特性に関してみえてくるものが多くあつたことや、再現可能性の原因を探求することで社会実装の手段を深く考察できることなどを実感でき、今回の研究を通して、改めて追試調査の重要性を再認識しました。

さて、第87回大会は、コロナの影響に伴いオンライン開催でした。オンラインによる学会参加は、様々な知見を効率的に取得できるといった点で有効だと思います。一方、これまでの対面での大会とは異なり、正式の質疑応答時間以外に、休憩時間などで行うインフォーマルな議論ができないといった点が心残りでした。インフォーマルな議論は、全く異なる領域の先生方とのお話や研究の裏話的なことも知ることができて、個人的には、大変貴重な時間です。コロナ禍が落ち着き、また皆様と対面でインフォーマルな議論に花を咲かせる機会を心待ちにしています。

最後に、このような振り返りの機会を与えていただき、感謝申し上げます。今後とも、宜しくお願ひいたします。

大谷 亮(おおたに・あきら)／2012年 中京大学より博士(心理学)を取得。現在、(一財)日本自動車研究所主任研究員。専門は交通心理学、発達・教育心理学。特に、子どもの交通安全に関する研究に従事している。

## 教育発表を終えて

井上 裕珠  
(日本大学大学院)



今年の日本応用心理学会第87回大会において、指導しているゼミナールの3年生が教育研究発表に参加させていただきました。学生たちにとっては初めての学会発表であり、開始前はとても緊張していたようでしたが、先生方からコメントをいただきたびに喜び、研究活動へのモチベーションが大いに高まっていました。実際、学会後には、先生方からいただいたアドバイスを基に議論を精緻化したり、新しい心理学実験を計画したりする学生たちの姿が見られ、指導教員として彼ら

らの成長を嬉しく感じておりました。発表を行った学生だけでなく、その様子を見ていたゼミナールの2年生も大いに刺激を受けたようで、来年の日本応用心理学会で教育研究発表を行うことを目標に日々研究活動を行っております。コロナウイルスの感染拡大によって、学生の学修機会が少なくなっていますが、教育研究発表という学生にとって貴重な学びの場を与えていただきましたことを心より感謝申し上げます。

私たちのゼミナールが研究教育発表を行うのは、日本応用心理学会第86回大会に続き2回目です。私自身が商学系の学部に着任したばかりで、心理学研究を行うゼミナールをどのように運営していくべきかを試行錯誤する中で、第86回大会で教育研究発表が新設されることを知り、喜んで参加いたしました。学部生の発表機会は学内に限定されることが多いように思いますが、日本応用心理学会の教育研究発表においては、先生方の研究発表と同じように学部生が発表させていただけるだけでなく、先生方が温かく研究に対して多くの質問やアドバイスをくださるため、学生たちのかけがえのない経験につながっております。これほどに貴重な機会は他にはないと思っており、今後も毎年、日本応用心理学会でよりよい教育発表を行うことを目標に、ゼミナール活動を行ってまいります。

井上 裕珠(いのうえ・ゆみ)／2016年一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了 博士(社会学)。帝京大学経済学部助教を経て、2018年4月より日本大学商学部専任講師。専門は、社会心理学と消費者心理学。

## 教育発表を終えて

相内 朱里  
(日本大学商学部)



今年の日本応用心理学会第87回大会において井上裕珠ゼミナールから3年生9人でポスター発表に参加させていただきました。ポスターは3チームに分かれ、「大学生における白色と黒色のイメージ調査」「知識があれば昆虫食のイメージは変わる?—昆虫食に対する情報が大学生の昆虫食に与える影響—」「好きな商品は、触るイメージをするだけで手放したくなる?—製品を触るイメージと関与の程度が心理的所有感に及ぼす影響—」のテーマで発表を行いました。

井上裕珠ゼミナールでは消費者行動を社会心理学の観点から研究しています。また心理学実験を行い、データを統計的に分析する方法やその解釈についても学んでいます。

3年生は井上先生のご指導の下、日本応用心理学会で発表することを目標に5月より本格的に研究活動に取り組んで参りました。実際に心理学実験を実施し、分析ツールを用いて心理学実験のデータの統計的な分析を行いました。今回の研究活動はオンライン上でのやり取りを中心に行つたため、チーム内での意思疎通が難しくもありましたが、活発に意見交換しあいながら取り組んできました。また、時にはほかのチームとアドバイスもしあいながら取り組みました。

私たちの研究成果をたくさんの先生方に評価していただける大変貴重な機会であり、緊張感もありましたが、コメントをいただくことを楽しみにしておりました。コメントをいただくたびに大変嬉しく、自分たちの視点になかった評価をいただき、たくさんの刺激を受け、非常に多くの学びを得ることができました。私たちの研究の問題点や改善点も見つかり、今後の研究活動の糧とすることができました。

最後にはなりますが、今回日本応用心理学会に参加した3チームの研究を発表する機会をいただき、またご指導いただいた井上先生、私たちの研究にアドバイスをくださった先生方に感謝いたします。先生方からいただいたアドバイスを参考にますます研究に励んで参ります。

相内 朱里（あいない・あかり）／日本大学鶴ヶ丘高等学校出身。現在、日本大学商学部商業学科マーケティングコース4年生。井上裕珠ゼミナールで消費者行動を社会心理学の観点から勉強している。

## 第87回大会 参加感想

佐々木 美智子

（志學館大学・龍桜高等学校）



今年の大会（Web開催）は、デジタル弱者兼視力弱者にとって、メリット・デメリット相伴うものになりました。以下、大会当日および録画参照期間中に感じましたことをいくつか述べさせていただきます。

- ① 理事会・会員総会、大会企画シンポジウム、特別講演、自主企画ワークショップ等は、遠隔地からもオンラインで参加できるWeb開催のメリットが良く出ていたように思います。東北山形の地で開催された特色も企画内容や登壇者に見て取れ、主催された方々とサポートされた技術者の方々に敬意を表します。Web期間中に録画を時間をかけて視聴することもできました。今後のデジタル技術の進化にも期待いたします。
- ② 口頭発表とポスター発表も、それぞれに工夫が見られ（特に若い世代）、パワーポイントの質の高さや、癒しの写真・イラスト挿入等、楽しく拝見し学ぶことができました。細かい図表は初めから読むのを諦めましたが。逆にデジタル技術の優劣が前面に出てしまうと、研究内容の吟味がおろそかになる可能性を感じました。
- ③ 私の23年間の会員歴と6年間の広報委員歴を通じて、本学会の良さは、幅広い領域と年代

にわたって、多様な研究交流が、自由でアットホームな雰囲気の下になされてきたことだと感じております。Web開催の大会でも、総体的にその伝統は受け継がれていたと思いました。

- ④ ただ、やはりリアルな対面での出会いと対話には代えられないことも多く、特に、タイムラグもある中、文字入力だけで質疑応答するポスター発表においては、困難さを感じました。広報委員の時のやり方のままに、総覽し、注目した発表に対して専門領域外の素人でも率直に質問を投げかけさせていただいた結果、失礼をいたしましたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。懐の深い本学会ならではの御教示とフォローをいただきました。本原稿の依頼は、「最も書き込みが多かった」という理由であったそうで、これもデジタル弱者の故かと汗顏の至りです。御高配に感謝申し上げます。

佐々木 美智子（ささき・みちこ）／志學館大学・龍桜高等学校看護学科専門課程非常勤講師。発達相談、障がいをもつ子どもたちと家族の支援、およびそれらの関連授業を長く続けている。子ども二人は独立し、夫と二人暮らし。庭仕事や、孫とその両親の育ちを見守るのが楽しみ。オンライン・ヨガレッスンを受けつつ、高齢期の人間発達を日々実践中。

# 第88回大会に向けて

来田 宣幸  
(京都工芸繊維大学)



日本応用心理学会第88回大会の実行委員長を務める来田宣幸と申します。クロスロードには3年連続3回目の登場になりますが、いよいよ京都工芸繊維大学での学会大会が近づいてきました。現在のところ、予断を許さない状況ではありますが、2022年9月17日(土)・18日(日)の2日間、通常の対面開催を基本として(一部オンライン配信を取り入れながら)開催する予定です。対面にライブ配信もおこないつつ、オンデマンド配信もおこなってしまおうとするフルスペック大会を目指しています。

多くの学会大会がリモート開催あるいは中止となつた2020年度。そして、一部対面での大会を復活させた学会もありましたが、リモート開催を中心であった2021年度。なかなか終わりの見えないコロナ禍において、対面での開催が期待されるようになつた2022年度。

原稿執筆時(2022年4月)の情報ですが、日本カウンセリング学会(8月5日～7日)、日本教育心理学会(8月10日～9月10日)、日本学校心理学会(8月21日)、日本自律訓練学会(10月7日～9日)などはオンラインのみの開催が予定されています。一方で、日本交通心理学会(8月6日7日)、日本犯罪心理学会(9月3日4日)などは対面開催予定と明記されており、さらに、「現地+ライブ配信+オンデマンド配信」のハイブリッド開催と記載されている日本心理学会(9月8日～11日)、日本特殊教育学会(9月17日～19日)、日本LD学会(10月29日～30日)など、様々な実施形態となっていました。

まだ手探りで進めている状況ですが、大会の成功には会員の方々の支援が必要です。多くの方に

参加いただくとともに、大会において対面・非対面のコミュニケーションを通して盛り上げていただきたいと考えています。そのためにも、対面とオンラインの良さを活かした企画を直前まで練り上げていきます。

いろいろなコンテンツを計画しています。今からでもまだ間に合います。ぜひ、参加申し込みのクリックを押して下さい。そして、9月、現地で、あるいは、リモートで皆さま方とお会いできることを楽しみにしています。



大会ホームページ



大会YouTubeチャンネル

来田 宣幸(きだ・のりゆき)／2003年 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(人間・環境学)。現在、京都工芸繊維大学基盤科学系教授。バイオメカニクス、運動生理学、スポーツ心理学などを守備範囲にしつつ、ファールゾーンのボールもがむしゃらに追いかけることをモットーに。

## 宮城県東松島市認知症支援事業

北川 公路  
(東北文化学園大学)



はじめに、本学会の長い歴史のなかで、はじめてオンラインで開催された大会になりました。その大会のトップバッターという重責も担わせていただいたことを光栄に思います。

東日本大震災以降、本学は東松島市の応急仮設団地や集団移転団地において、行事や地域活動のボランティアだけではなく、学生自らが見守りのしくみや提案をするなどコミュニティ醸成のための支援活動をしています。また、東松島市は2016年度に医療福祉サービス復興再生ビジョンを策定するにあたり大学教職員を学識経験者として選任し、相互に協力しあう関係を築いています。包括連携に関する協定を締結するなかで企画者が所属するリハビリテーション学科作業療法学専攻で進めている認知症カフェの取り組みについて行政側の東松島市(石垣仁子氏)、大学側の教員(香山明美氏)、そして認知症カフェの参加者(成澤孝子氏)に話題提供をしてもらいました。

東松島市は、高齢化がすすみ要支援・要介護者が増加傾向にあることから認知症の症状の悪化予防、家族の介護負担の軽減などを図っていくことを目指しています。認知症カフェの目的は、地域の方の認知症への理解を深め、認知症の方や家庭を支えるような地域社会にすることです。認知症の専門医に認知症の話をもらう、家族の介護をしている体験を話してもらう場になっています。そして、参加者は認知症の理解が進み健康を維持するためにカフェに参加し、認知症だけではなく他のことも学ぶことにつながっています。カフェに毎回参加されるひと、テーマや講師の方に関心があるひと、相談を希望し参加されるひとなど参加動機もさまざまになりますが、多くの参加者は

これから生き方や健康に非常に关心をもっています。これからも、地域包括支援センターと各事業所などがお互いに情報共有しつつ、地域の認知症対策に貢献していきたいと考えます。

成澤氏は、自分自身が学ぶだけではなく、地区の方々に伝え参加の呼びかけをしています。さまざまな調整をして町内会行事として、地区の女性の方々と共に「健康講話とティタイムを楽しむ会」を開き、健康維持とまちづくりに取り組まれています。

これらのこととは、老年心理学や老年社会学の知見通りの高齢期において有益なことです。認知症カフェが参加者の学びの場になっています。生涯学習という観点では、高齢者特有の教育的ニーズと合致します。自発的活動は、日常生活動作能力、手段的日常生活動作能力を維持・増進し、身体的な機能低下、障害を予防し、死亡率も改善するなどのポジティブな身体的影響が示されています。また、心理面では生活満足度、主観的幸福感、自尊感情の向上、抑うつや不安の低下といった影響が示されています。さらには、地域の方々とつながることは、ソーシャルネットワークのサイズが大きくなり他者との交流頻度が多いほど主観的ウェルビーイングや自尊感情が良好になることが示されています。そのため、この活動を通して地域の状況を的確に把握し、本学の資源をいかしながら引き続き健康維持とまちづくりの支援をしていきます。

---

北川 公路(きたがわ・こうじ)／東北文化学園大学医療福祉学部准教授。日本応用心理学会理事。日本老年臨床心理学会評議員。専門は老年心理学・行動老年学。公認心理師。応用心理士。

# 新型コロナウィルスがもたらした対人不安と、アフターコロナの対人関係へ向けて

佐藤 恵美

(東京富士大学大学院)



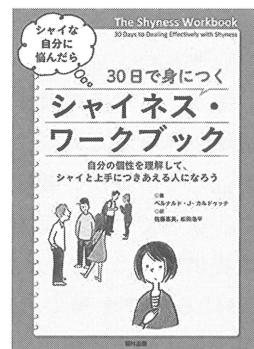
この2年間、教育、産業、ライフスタイル、対人関係など、良くも悪くも大きな変化があった。本テーマを取り上げたのは、社会的距離を取るためのオンラインやマスクという手段が対人不安や他者との関係性にどう影響するのかという疑問を持ったことである。

社会的距離をとる手段において、オンラインという方法はメリットとデメリットがある。大学でのオンライン授業を感じたことは物理的に離れていても参加できるというメリットがあるが、心理的距離を自分でコントロールする必要がある。対面で何かをする場合、自分と他者の身体が見えるのでノンバーバルな要素が見えるし、ちょっとしたことでもコミュニケーションになるので「何となく」つながっていられる。しかし、オンラインの場合、画面に映っている自分の情報をどの程度見せるかを自分の意志で選択できるので、他者から不都合な何かを見られるストレスはほとんどない。しかし、相手にノンバーバルな要素を見せないことは、「自分で気づかないこと」は援助されないという危うさも持つ。オンラインは便利だが、自分で操作できる部分が大きい分、自分から行動、発言していかないと、「自分が大学生かどうか」というアイデンティティが持てず、コミュニケーション自体が一つのタスクになってしまう可能性がある。これまで「何となく」決めていたものが、オンラインという選択肢が増えたことで、自分で意思決定をすることが必要な時代になっていくだろう。

また、社会的距離が遠くなっただけで、より近くなる関係性がある。物理的・心理的に近すぎる距離は家族間での虐待やDV問題を引き起こすこ

とも多い。遠くなってしまった他者からのソーシャル・サポート(たぶん専門家も)は、助けを求めている見えない人々と、いかにアクセスを共有し、どのような距離を保っていくかという手段を考える必要がある。

社会的距離をとることでできてしまった心理的距離による対人関係の変化は、時間の針を戻しても戻らない。特に、青年期に対人関係を学ぶ時期に経験で学習することが必要なことを学べなかつた人たちがいる。インターネットを使った世界は一見広いが、自分の世界の認知が狭いと日常生活よりも狭い世界を生きることになってしまうだろう。アフターコロナでは、「オンラインか対面か」を選べる時代になったとき、現実的な他者との距離と自分で決めた心理的距離をどのように取っていくかが課題になるだろう。



佐藤 恵美(さとう・えみ)／東京富士大学大学院准教授。博士(心理学)、公認心理師。2009年より東京富士大学専任講師、2013年より現職。専門は青年期のパーソナリティ発達とキャリア発達に関する調査研究と、パーソナリティ認知に関する実験研究を行っている。主な著書は、「シャイな自分に悩んだら30日で身につくシャイネス・ワークブック 自分の個性を理解して、シャイと上手につきあえる人になろう(2020、福村出版)」。

## コロナ禍と差別・偏見

南條 正人

(東北文教大学 現:仙台大学)



企画・司会：南條正人（東北文教大学）

話題提供者：南條正人（東北文教大学）

話題提供者：渡邊京子（社会福祉法人走翔会）

話題提供者：高梨友也（東北文教大学）

日本応用心理学会第87回大会の大会企画シンポジウムとして、「コロナ禍と差別・偏見」を開催しました。本学会大会では初めてのオンライン開催、第87回大会の最終セッションにもかかわらず、多くの皆さまにご参集いただき、感謝申し上げます。

この大会企画シンポジウム「コロナ禍と差別・偏見」は、コロナ禍の状況下における障がい者や高齢者の現状を紹介し、福祉サービス利用者や医療・福祉従事者、これらの家族が受けた差別・偏見を通して、相手の立場に立った言動について検討するという趣旨で企画しました。

大会企画シンポジウム「コロナ禍と差別・偏見」開催にあたり、企画者である南條正人より挨拶と企画趣旨を紹介しました。その後、南條による話題提供として、障がい者やその家族、職員が受けた差別・偏見を減少させるためには、障がい者との直接的接触を通して、障がい者理解が必要であると述べました。続いて、渡邊京子、高梨友也の両氏による話題提供が行われました。渡邊は、福祉サービスにおけるコロナ禍での差別・偏見は、「リスク管理（感染拡大防止策）」と、「正確な情報」という二つのポイントであると述べました。また、障がい当事者やその家族は、見えないものに対する不安感が、利用制限につながってしまうため、新型コロナウイルスの感染状況の情報を正しく伝え、それを考慮し不安を軽減していくことが大切であると述べました。高梨は、高齢者福祉施設に

対する行政の「個室だから感染者も対応できるだろう」という、「～だろう」という偏見等を紹介し、高齢者福祉施設の実情や新型コロナウイルスについて理解を深めることで不安を減らし不要な偏見を予防する必要があると述べました。

本シンポジウムを通して、コロナ禍の状況下における障がい者や高齢者に対する理解が深まるとともに、障がい者や高齢者の方々に対する差別・偏見が無くなることを願いたい。

---

南條 正人(なんじょう・まさと)／1977年 宮城県生まれ、東北福祉大学社会福祉学部社会福祉学科卒業後、一般企業に勤務。退職後進学し、仙台大学大学院スポーツ科学研究科健康福祉領域修了。東北文教大学短期大学部・東北文教大学准教授を経て、現在は仙台大学体育学部健康福祉学科准教授。

## 心理学における実践 第2報： 心理学の社会実装をめざして

田中 堅一郎

(日本大学大学院)



日本応用心理学会第87回大会へ自主企画ワークショップ「心理学における実践 第2報：心理学の社会実装をめざして」が1日目午後4時より開催されました。

前回に引き続きこの企画は、私(田中)の所属する日本大学大学院総合社会情報研究科(以下、GSSCと略記)の特別研究指導(ゼミナール)での討論から生まれたものです。今回は、ゼミナールのメンバー(稻葉隆さん、小林敦子さん、二瓶哲さん)に加えて、プラス株式会社ファニチャーカンパニーの岡本祐介さん(マーケティング部副部長)にも参加して頂きました。

副題に示された「社会実装」についてですが、研究結果を実際に社会で使われるものにするための活動のことで、理念的段階にとどまる機能を具現化させること(実際に動く具体的なものとして現実世界に出現させること)といえます。これまで社会実装の活動は、工学領域を中心でしたが、今回のワークショップでは、話題提供者自身の研究成果を各自が携わる業務や事業の中での社会実装の事例が報告されました。まず、稻葉さんは株式会社日本カラーデザイン研究所での事業とご自分の研究成果を盛り込んだ『色彩と触感をテーマとした「現場」の問い合わせ心理学的研究』について報告されました。次いで小林さんは職場でのジェンダー・ハラスメント軽減のための企業研修を題材に『認知的複雑性の研修がジェンダー・ハラスメントを低減する』という話題で、「ジェンダー」という用語を使わないでジェンダー・ハラスメントを軽減させる手立てについて述べられました。さらに『いい仕事は、いい雑談から』本音で会話ができる職場環境づくりに向けて－研究人材との連

携による総合オフィス家具メーカーとしてのチャレンジ』という話題提供では、二瓶さんから職場交流活動の概要と岡本さんからプラス株式会社が提案するインフォーマル・コミュニケーションを活性化する職場環境について述べられ、二瓶さんとプラス株式会社とのコラボレーションの計画が示されました。

討論では、社会実装をキーワードに話題提供者間でそれぞれが示した研究内容についてかなり踏み込んだ質疑応答がなされました。これはこれまで同じゼミナールで忌憚なく討論していたことがあってこそ可能だったと思います。

COVID-19の影響で学術研究のみならず、職場での実践研究も滞っているようですが、こうした「逆境」にめげず、これからも少しずつ社会実装としての実績を積み上げていくことを企画者であるわたしは期待しています。

田中 堅一郎(たなか・けんいちろう)／日本大学文理学部心理学科卒業、日本大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士(心理学)。2003年 日本大学大学院総合社会情報研究科助教授、2007年より同大学院教授。専門：産業心理学、組織行動。

## 「陰謀論」の心理学 サブカルチャーとしての 「陰謀論」・マインドコントロールとしての「陰謀論」

山岡 重行

(聖徳大学)



新型コロナウィルスにより我々の生活は一変しました。心理学と並ぶ俺のもう一つのフィールドであるバンド関係も活動停止を余儀なくされた。数年前から「陰謀論者」を自認していたバンド関係の長年の友人が、2020年秋のアメリカ大統領選挙以降ますます陰謀論に傾倒し、バンドメンバー間の関係に軋轢が生じた。2021年1月6日、トランプ前大統領支持者によるアメリカ連邦議会議事堂襲撃事件が発生した。個人的な理由も含まれているが、「陰謀論」をテーマにワークショップを企画することに決めた。

まず始めに、俺が編集した「サブカルチャーの心理学(福村出版)」に、「オカルト・超常現象・疑似科学・陰謀論」の章を執筆した菊池聰氏に話題提供を依頼した。

陰謀論はいくつかの情報を大きな陰謀で結びつけ物語を作り出す。それは娯楽として機能する。トランプ関連の陰謀論は、信奉者が「Q」からの情報をトランプの演説やツイートなどと結びつけて大きな陰謀を描き出すゲームとなる。

陰謀論ゲームを続けて「自分の頭で考えた」結果、陰謀論者は皆同じことを主張し始める。これはマインドコントロールだ、俺は確信した。YouTubeの陰謀論動画などで陰謀論ビリーフを自らインストールし、陰謀論思考を生み出すビリーフシステムを形成するのだ。陰謀論はコントロールする主体と意図を欠いた新たなマインドコントロールなのだ。であれば、西田公昭氏以上の適任者はいない。指定討論者は松田浩平大会委員長に働いてもらうことになった。

ワークショップ当日。まず山岡が陰謀論の概要について説明し、陰謀論にはサブカルチャーの側

面とマインドコントロールの側面があることを紹介した。次に菊池聰氏が陰謀論に関する心理学的研究を紹介し、日本における陰謀論信奉について話題提供を行った。西田公昭氏は従来型のマインドコントロールと陰謀論の新型マインドコントロールを比較・分析し、全体主義やテロリスト社会と陰謀論ナラティブとの関係に関しても社会心理学の観点から話題提供を行った。指定討論者の松田浩平氏と話題提供者の討論の後、フロアの皆さんも交えてのディスカッションとなった。

フロアの皆様の反応を直接見ることができないもどかしさはあったが、成功と言ってよいだろう。関係諸氏に感謝の意を表したい。

なお、現在制作中の「サブカルチャーの心理学2」には、このワークショップを元にした「陰謀論」に関する章を菊池聰氏、西田公昭氏、それに山岡が執筆する。2022年内に福村出版より出版予定なので、関心のある方は「サブカルチャーの心理学2」を参照していただきたい。

**山岡 重行 (やまおか・しげゆき) /**

学 位	博士 (心理学)
所 属	聖徳大学心理・福祉学部心理学科
専 門	社会心理学
主な著書	腐女子の心理学 (福村出版) 腐女子の心理学2 (福村出版) サブカルチャーの心理学 (福村出版)

学位を取得しました

## 小原 宏基

(湊川短期大学)



今年の3月、帝塚山大学大学院にて念願の博士(心理学)の学位をいただきました。博士論文の題目は「視知覚機構の解明に関する基礎的研究－垂直-水平錯視を用いて－」です。

元々、私は工学分野でロボットの研究を行っていました。今でこそ様々なロボットがありますが、私が研究を始めた頃は、やっと二足歩行できるロボットが現れたくらいでした。私自身研究を進める中で、“人間らしさ”の表現方法に興味を持ったことを今でも覚えています。

そのような背景から人間を知る必要性を感じ、心理学について独学を始めました。しかし、学べば学ぶほど心理学は奥が深く、理系科目とは程遠いものであることを実感しました。特にカルチャーショックを受けたのは、理系科目は「 $1+1=2$ 」のように明確な答えがあるのに対し、心理学は同じ問い合わせに対して様々な答えがあるということです。

このような経験から心理学を本格的に学ばなければならぬと考え、ロボットという無機質な世界から、人間という有機質な世界に飛び込みました。最初は人間という複雑なものや目に見えないこころを学ぶことに戸惑いを感じましたが、悩みながらも人間自体のことや臨床心理学分野を学び続けました。そして臨床心理士の資格を取得後、工学分野と心理学分野を結び付けた今の研究テーマにたどり着きました。

帝塚山大学大学院修士課程の頃から、同大学教授 川合悟先生より“工学分野を生かした方が良い”とご指摘をいたしましたが、その頃の私にはその言葉の意味が分からませんでした。しかしその後、川合先生と何度もお話をすることでその言葉の意図が分かるようになりました。そして、2016年 同大学の博士後期課程に入学し、今に至

ります。実際、このように振り返ってみると自分自身の背景を生かすことが近道だったということを痛感します。

現在は湊川短期大学にお世話になり、サポートをいただきながら、ここまで研究を続けることができました。その経験も研究に活かされています。

さて今回取得した博士の学位は取得して終わりではなく、ここからが研究者としての始まりだと私は考えています。そのことから教育者として後進を育てることはもちろんですが、研究者としてこれからもしっかりと研究を行い、この学位に恥じないような行動をしていきたいと思います。今後とも、何卒宜しくお願い致します。

**小原 宏基 (おはら・ひろき)**／1981年 大阪府生まれ。和歌山大学システム工学部卒業、同大学院システム工学研究科博士前期課程修了。ロボットの研究中、心理学に興味を持ち、2009年 帝塚山学院大学人間文化学部に編入。帝塚山大学大学院人文科学研究科修士課程を経て、2022年 同大学院心理科学研究科博士後期課程修了。2019年より湊川短期大学人間生活学科に勤務。

学会賞(論文賞)

## 田中 圭

(聖徳大学)



## ★はじめに

この度は、輝かしい賞を頂戴し光栄に思います。日本応用心理学会論文賞という栄えある表彰を受けまして、自己紹介と合わせ一言謝辞を述べさせていただきたいと思います。受賞論文である「浅い関係で用いられるスキルが行動活性化に与える影響」は、筑波大学大学院3年制博士課程在籍時の研究になります。行動の変化に焦点を当てた、うつ病に対する構造化された短期療法である、行動活性化を主題として、ソーシャルスキル研究者である私の強みを活かす形でご指導いただきまし

た共同執筆者の沢宮容子先生には心より感謝申し上げます。また、選考いただいた先生方、日頃より研究と実践の中でご指導いただいております先生方にはこの場をお借りして御札を申し上げたいと思います。

## ★ 研究動機

私は、修士課程から、博士課程までに7年間現場で臨床実践を積んでまいりました。抑うつ症状に悩まされるクライアントさんたちと、行動療法を軸として共に奮闘してまいりました。再発予防効果が高い行動活性化ですが、その効果の一助になる日々の出来事として、浅い関係の人々との交流があります。例えば、特別親しいわけではない友人との会食を例に挙げてみると、クライエントさんは、その会食で胸の内を打ち明けるような経験ができなかったとしても、予定が組まれていること自体が活動スケジュールの維持に繋がったり、行動レパートリーの拡大に大いに貢献することができます。そこで、このような抗うつ行動を活性化させていくための浅い関係のポジティブな効果について明らかにしたいとの思いから研究に取り組みました。

## ★ 研究成果と今後の展望

研究の結果、笑って明るく振舞いその場を盛り上げようとする「楽しさ演出スキル」の行使後に正の強化子が随伴することによって、目標に向かう活動の「活性化」を促すことが明らかにされました。さらにこの影響過程には、ポジティブ感情が正の強化子として随伴していることが示唆されました。ネガティブな意味合いで扱われることの多い浅い関係ですが、研究を通して、日々の付き合いの下支えになっている関係として捉え直すことでポジティブな側面にスポットをあてることができました。

展望として、臨床的介入へ貢献できるような頑健な証拠を得るべく、今後は実験研究を重ねたいと考えております。今回の表彰を心の糧として、表彰の栄誉に恥じぬよう精進していく所存でおり

ます。皆様どうか今後とも、よろしくご指導ご鞭撻をお願いいたします。

**田中 主**(たなか・けい)／臨床心理士・公認心理師。筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程修了。博士(心理学)。筑波大学学生部を経て、現在聖徳大学心理・福祉学部講師。

学会賞(奨励賞)

前田 楓

(立教大学)



この度は名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。評価いただいた論文は、私が修士課程1年のときに行なった調査・実験研究をまとめたものです。初めて投稿した論文ということもあり、稚拙な表現も多く、その内容も的確なものではなかったと思います。しかし、論文を審査してくださった先生方、また編集委員の先生方から有益なコメントを数多くいただき、そのコメントを踏まえ改稿を重ねるにつれ、少しづつではありますが説得力を有する論文になり、ますます私の思い入れの強い論文にもなっていったと感じております。この場をお借りして、査読者の先生方、編集委員会の方々、そして論文を評価していただいた選考委員の先生方に心より御札申し上げます。

この論文では、「自分の命は自分で守る」という「命てんでんこ」の教えを実践することはなぜ難しいのか」という問い合わせています。命てんでんことは、「自然災害から身を守るためにには、人のことなどかまわずにてんでんばらばらに逃げなさい」という三陸沿岸の地域に伝わる教訓を指します。この教えの実践は、「自助の原則」にかなう理性的な判断であるはずですが、災害場面において他者をとっさに助けようとする感情的な判断とは折り合いにくく、場合によっては「利己的」や「薄情」などといった否定的な意味を含む教えとして

受け取られる可能性が考えられます。こうした可能性を踏まえつつ、この論文では、独自に作成した仮想的な土砂災害ジレンマ状況を参加者に想起させる調査・実験を実施しました。その結果、災害場面における感情的な判断が命でんでんこの教えの実践を阻む要因となること、しかし、そうした感情的な判断は、命でんでんこのもう一つの意味である「他者非難の促進（自分が逃げることによって他の人たちの避難を促す）」について考えることにより抑制されうることなどが示唆されています。

防災や減災の実践は、私たちが考えているほど容易なことではありません。災害場面では、逃げることが自分の命を守るための最良の判断だと頭ではわかっていても、家族や友人を助けたいという感情がその判断をとらせない可能性があります。このような感情と理性のギャップを念頭に置きつつ、「他者の命を助けたい」という感情だけで判断せず、災害場面における自分の行動選択によって想定される結果まで考えることが重要だと私は考えています。この度の受賞を励みに、今後も、防災教育のあり方を考える上でのヒントを提供するような研究知見を出していきたいと思っています。この度は本当にありがとうございました。

**前田 楓（まえだ・かえで）**／立教大学現代心理学部心理学科助教。社会心理学の視点から、学校教育の現場が抱える諸課題をどのように解決していくかという問い合わせについて考察している。現在は、二重過程理論の観点から人間の協力行動を理解するための研究に尽力している。

## 学会賞受賞論文 (田中圭先生)へのコメント

**古谷 嘉一郎**  
(北海学園大学)



受賞論文を拝読させていただきました。面白いところに目をつけられたなと思っています。私自身、ソーシャル・スキルに関する研究を複数行ってまいりました。また、認知行動療法を専門とする共同研究者とも研究をしてきたため、行動活性化については多少理解をしているつもりです。しかし、このソーシャル・スキルと行動活性化の関係性に目をつけられたのは、時間をかけ現場で臨床実践をされた田中先生だからこそと思っています。まさに、現場と理論をつなぐ研究と言えるでしょう。

さて、内容に着目していきましょう。浅い友人関係がどのような効用をもたらしているのかが、本論文において私が気になっていた点でした。すると、単に浅い友人関係だからというわけではなく、ソーシャル・スキルから行動活性化を介した上で抑うつや対人不安が低減される可能性があることがわかりました。これは私にとってはエキサイティングな発見でした。単に関係がどうだからというわけだけではなく内的な過程を見いだされているからです。まさにこれは対人心理学、社会心理学と臨床心理学をつなぐ研究と言えます。

今後も、このつながりの中に潜む新たな発見を田中先生に期待しております。本当におめでとうございました。

**古谷 嘉一郎（ふるたに・かいちろう）**／2007年、広島大学大学院生物圏科学研究科修了、博士（学術）。現在、北海学園大学経営学部准教授。最近の研究テーマは、子育て中の養育者のバーンアウトを引き起こす要因の解明。

## 学会賞受賞論文 (前田 楓先生)へのコメント

谷田 林士  
(大正大学)



前田楓先生（掲載当時：安田女子大学大学院生、現：立教大学）と橋本博文先生（現：大阪市立大学）の論文は、釜石市で防災効果が示されたものの広く普及が進まない「命でんでんこ」の教えに対して、二重過程理論を基盤とした2つのシステムを用いて、普及を阻害する心理的要因を検討した応用的研究です。災害発生時に感情と理性のシステムのそれぞれが優勢に作用すると、他者を助ける、もしくは逃げるという異なる行動を選択すると仮定するジレンマ状況での判断を場面想定法で尋ね、「命でんでんこ」に対する評価と場面想定法の判断の関連性を検討しており、独創性に富んだ理論研究の側面も有しています。防災教育への在り方に示唆を与えるものとして学会賞（奨励賞）の授与が決まりました。

第一著者である前田先生は、共著者の橋本先生とともに、国内外の学術誌に数多くの論文を公刊しています。昨年の日本応用心理学会若手会員研究奨励賞を受賞しています。大学院生として日々研究に真摯に向き合い、そして、たゆまぬ努力の結果として、これらの素晴らしい成果を上げていると思われます。

前田先生は、学校教育や防災教育をテーマにした応用研究を進めており、奨励賞の論文のみならず、応用心理学研究誌において養護教諭のスクールカウンセラーに対する評価を検討した短報（橋本・前田, 2021）も報告しています。一方で、集団葛藤状態での社会的ジレンマに関する理論研究にも従事しており、前田先生を第一著者とした研究論文が英文雑誌に掲載されています（Maeda & Hashimoto, 2020）。実験を実施して理論検証を行った研究です。このように前田先生は、応用と

理論という両翼で活躍する、稀有な存在の優れた若手研究者といえるでしょう。この前田先生の強みは、奨励賞論文におきましても十分に発揮されています。今後も両翼を強く羽ばたかせた研究を応用心理学研究誌で発表されることを心待ちにしています。

谷田 林士 (たにだ・しげひと) / 2008年、北海道大学大学院文学研究科博士課程満期単位取得退学、博士（文学）。現在、大正大学心理社会学部准教授。研究テーマは、生理指標を用いた共感性の測定法。

## 船舶運航と応用心理学

渕 真輝



神戸大学海洋政策科学部（海事科学部）の歴史を遡りますと、大正時代にまで遡ります。外国航路の大型船を操る優秀な日本人船長や機関長をはじめとする幹部船員（外航船舶職員）の養成が目的の学校でした。戦後は国立神戸商船大学となり2003年に神戸大学と統合し海事科学部が誕生、2021年には海洋政策科学部が設置され、時代に合わせて変化するところは変化していますが、外航船舶職員を継続して輩出しています。島国日本において海運は日本人のライフラインとして必要不可欠な産業であり、大型の外国航路を航行する商船の運航を管理するために、外航船舶職員としての技能を有する海技者は必要不可欠です。海運会社における日本人海技者は各社の船員のほんの数%なのですが、海上勤務が4割程度、陸上勤務が6割程度と海陸で海運会社の要として活躍しています。

私も神戸商船大学を卒業して日本郵船という海運会社入社、航海系の海技者としての技能を磨いていたのですが、運命のいたずらとしか言いようがありませんが、母校に戻ることになりました。



ポンドに係留中の深江丸（旧附属練習船）

正直研究に興味は無く大学附属練習船の航海士+aをすれば良いのだろうと思っていました。しかし当然のことながら研究をしなさいと言われました。自身の経験を振りかえりますと、なぜ授業で習った海上交通ルールどおりに船は衝突回避をしていないのか、そのような現場で安全に航行する能力をできる限り早く身につける方法は無いのか、というような研究テーマにたどり着きました。右も左も良くわからないまま大阪大学人間科学研究所に受け入れていただきまして、臼井伸之介先生の指導のもと、優しい年下の先輩のアドバイスなどもあり、無事に修了しまして現在に至ります。

少しだけ私の現在の研究のお話をします。船の世界ではカタフリという言葉があります。船内で部屋に集まり、何か飲みながら自慢話やよもやま話に話を咲かせることを指します。遊びの話から仕事の話まで話題はなんでもあります。このカタフリの仕事に関する部分には、先輩の自慢話から失敗談なども含まれ、うまく仕事をこなすためのポイントが含まれていることから技能の伝承を担っているとも言えます。一方で船の上でも自動化が進み、船員数が減少し、また船室は個室になり、混乗と言いますが日本人だけで運航しているわけでは無く外国人と共に乗船し働いています。つまりカタフリの機会は減少しています。このような状況の中、船舶の衝突回避についても新人はアドバイスを得る機会は少ないだろうと考えました。もちろん会社での研修はあるのですが、会社に評価されると分かっているのですから、何かしら構えてしまう部分もあるだろうと思います。そのような背景の中、2年にわたり船長や一等航海士といったエキスパートにオンラインでヒアリン



深江丸出港①



深江丸出港②

グを行いました。テーマは、船舶衝突回避場面について『昔ヤバかったけれど何とか乗り切ったぜ経験』です。私が聞き手になると相手も構えてしましますから、研究室の船長・航海士を目指す学生にセッティングからインタビューまで全て実施してもらいました。文字起こしされたヒアリングを読みますと、みなさん結構カタフリをしてくれていました。担当学生はとても参考になっただろうなあと思います。カタフリの内容を分類すると、当然綺麗に分類できないのですが、無理やり特徴めいた状況を抽出しました。これを本学の操船シミュレーター運用の神様と言われる方にお願いし、複数のシナリオを作成いただきました。本学の学生や新人航海士にお願いしてこのシナリオを用いた操船シミュレータ実験を行っているのですが、操船内容に違いがあってとても興味深いデータが取れていると思っています。また実験後の感想は概ね良好で、リップサービスもあるのでしょうか、また参加したいとほとんどの人が回答しています。

船舶運航の話は、みなさんにとって少し遠い話だとは思いますが、本学では附属練習船を用いた教育共同利用というプログラムを行っています。



操船シミュレータの様子



海神丸（現在の附属練習船）の教育共同利用の様子（船橋説明）

海という大自然と世界物流の一端を感じていただけると思いますので、一度ご検討いただければと思います。

**渕 真輝** (ふち・まさき) / 1995年 神戸商船大学商船学部卒業、日本郵船(株)入社、貨物船、LNG船等の航海士を務める。2003年 神戸商船大学助手、2004年 神戸大学海事科学部助教を経て2013年より准教授。2003年に一級海技士(航海)を取得、2011年大阪大学大学院人間科学研究科を修了、博士(人間科学)。

## ▶ 中京大学心理学部 ◀

## 交じり合う心理学

松本 友一郎



中京大学心理学部は2000年に日本で最初の心理学部として誕生しました。前身である文学部心理学科は1966年に誕生したのですが、学部として独立してからの歴史はまだ四半世紀にもなりません。まだまだ若い学部で、いろんな挑戦をしていきたいと考えています。学部内の構成としては、実験心理学領域、応用心理学領域、臨床心理学領域、発達心理学領域の4領域からなります。領域間の垣根は低く、ゼミに配属された後も学生は異なる領域についても自由に学んでいます。また、大学院でも、違う領域の院生からも質問を受けることがあります。そういう自然に交じり合っているところは居心地の良さを感じます。

さて、心理学部の中の応用心理学領域では産業や交通など様々なテーマを扱っています。この領域で特におもしろい取り組みは、応用心理学実習という科目で実施している船舶研修ではないかと思います。この研修では、神戸大学海事科学研究科の附属練習船に泊りで乗せていただいて、船に関する研修を受け、船内の生活を体験させていただいております。この研修は、私が着任した10年前には既にあったのですが、船舶における実践と心理学で得られる知見の接点を考えると興味がつきない内容です。安全な航行の実現から船内生活における快適性の工夫まで、応用心理学について学ぶための宝船ともいえる研修です。COVID-19への対応のため、この研修も中止が続いているましたが、今年度は再開に向けて準備を進めております。

私の研究室は組織心理学及び社会心理学を専門としています。ゼミ生は、私が指導できる範囲を大きく外れない限り、好きなテーマを選んで研究

に取り組んでいます。毎年、バリエーションが豊かで勉強になります。私自身は、職場における対人関係とストレスの関連から研究を開始しました。現在は、職場の中で互いに思っていることを表出できないのはなぜかというテーマに関心を持っています。人間はそれぞれに独立していても領域や分野を跨いで交じり合うことができる一方で、同じ組織において実は同じことを思っていても交じり合えないこともあるのはなぜか、それを知る糸口を探しています。



都会と自然が交じり合うキャンパス

**松本 友一郎** (まつもと・ともいちろう) / 中京大学心理学部応用心理学領域教授、大学院心理学研究科長。専門は組織心理学、社会心理学。大阪大学人間科学研究科助教、中京大学心理学部講師、准教授を経て現職。

## ▶ 関西国際大学心理学部 ◀

# 多種多様な犯罪心理学の理論と実践を提供

## 板山 昂



関西国際大学心理学部は、2021年4月に兵庫県三木市のキャンパスから神戸市中央区の神戸山手キャンパスに移転し、非常にアクセスの良い場所にあります。本学の心理学部には、臨床心理学専攻、産業・消費者心理学専攻、災害心理学専攻、犯罪心理学専攻の4つの専攻があり、私は犯罪心理学専攻と産業・消費者心理学専攻を担当しています。今回は、本学の紹介として犯罪心理学専攻について少しお話したいと思います。

犯罪心理学専攻の担当教員は警察官、法務技官、科学捜査研究所研究員等の実務経験者など、6名体制で犯罪心理学の教育にあたっています。犯罪心理学関連の専門科目が充実していることはもちろん、裁判所や少年院などの見学機会だけでなく、海外体験プログラムで「米国のコミュニティ防犯と青年犯罪を中心とした犯罪に関するフィールドワーク（アメリカ/シアトル）」、国内でも「高齢者を特殊詐欺から守ろう（注意喚起の寸劇など）」や「BBS活動を通して学ぶ地域の更生保護」などの社会貢献活動に参加することもできます。私も以前、海外体験プログラムでミャンマーや台湾の地域防犯に関するリサーチプログラムを担当し、日本とミャンマーや台湾における防犯に対する意識、犯罪の実態や治安対策の違いを学生とともに調査しました。それぞれ大きな違いがみられ、学生はなぜそのような違いがみられるのか、歴史や文化、制度の違いも踏まえながら考えました。日本国内の警察署や刑務所などの専門機関だけでなく、現地の専門機関への訪問、現地の一般の方へのインタビューや質問紙調査、授業で学んだ環境犯罪学などをもとにフィールドワークを行うなど、学内ではできない体験を通して学びを深めています。

私は「司法・犯罪心理学」という科目を担当していますが、授業のはじめに「犯罪心理学は犯罪者の特性や犯行の原因、犯行時の心理状態などを明らかにするものと思っていませんか？」それは“犯罪者心理学”と言ってもいいかもしれません。犯罪が起こるとそこには被害者がいて、その人は傷ついているはずなのに、ついついどんな人が犯人なのかばかり気にしてしまいますが、まずは被害者・ご家族のことを心配する必要もあるのではないか？…etc」このように問いかけると学生はハッと我に返ったような表情をしています。

学生には幅広い視点で、客観的に犯罪について考えて欲しいですし、犯罪心理学には犯罪原因論、捜査心理学、法と心理学、被害者心理学、矯正・更生保護の心理学、防犯心理学などの領域がありますので、様々な観点から犯罪に関わる心理を考察できるよう教育にあたっています。



神戸山手キャンパスの心理学部がある棟

**板山 昂** (いたやま・あきら) / 大阪府生まれ。専門は社会心理学、犯罪心理学、法心理学。一般市民の量刑判断や刑罰觀、社会的制裁、矯正施設出所者に対する偏見などに関する研究を行っている。最近は、社会心理学や犯罪心理学を活かして岡山県教育委員会不祥事対策チームのアドバイザーとして不祥事対策に取り組んでいる。主な著書に『入門 司法・犯罪心理学—理論と現場を学ぶ（共著）』（有斐閣）など。



| ア | ワ | - | ド |

2020年度齊藤勇記念出版賞を受賞しました。

## 悪いヤツらは何を考えているのか ：ゼロからわかる犯罪心理学入門

桐生 正幸 著

2020年7月15日発行

SBクリエイティブ(株)

本体1,000円(税別)



以前から、専門書や大学テキスト以外に、我々の生活に起きたる身近な犯罪や具体的で役に立つ防犯について、一般書を書きたいと思っていました。本書は、客観的データに基づき研究が進められている「犯罪心理学」をベースに、より多くの人に読んでいただく目的で出版させていただきました。

犯罪心理学の社会一般的なイメージとして、猟奇的な連続殺人事件や短絡的な大量殺人事件などの動機を解明する学問であり、加害者のみに焦点を当てる学問と抱かれがちです。実際、そのような凶悪事件において精神鑑定などが行われています。しかし、ご存知のように、それは司法精神医学の領域であり、犯罪心理学の一分野でしかありません。

近年の犯罪心理学の定義 (Bull et al., 2006) は、「司法手続きが直面する問題に、心理学的知識や方法を適応する学問であり」具体的には、「臨床的判断による査定、心理学による実験、統計手法を用いた数理、検察や弁護士への助言」を行う学問となっています。この定義が示すように、犯罪者の異常な動機を明らかにするだけではなく、人間の行動に関する観察、調査や実験の一般的研究成果を、犯罪領域に落としこみ検討するのも犯罪心理学となります。犯罪者の行動も、そのメカニズムや特徴においては一般的な人間行動と、さほど変わりはない、といった考え方になって研究が進められています。

そのような考えをベースに、本書は構成してみました。

まず、犯罪が起きる背景や殺人、特殊詐欺、ストーカー、ひったくりなど身近な犯罪における犯罪者の心理を記述しました、また、犯罪統計から見える実態や、犯罪などに関する有名な心理学実験なども紹介しました。加えて、テッド・バンディ、アンドレイ・チカチーロ、エド・ゲイン、チャールズ・マンソンなど、犯罪史上に残る猟奇的殺人犯のトピックも収録してみました。他方、犯罪被害に遭わないとあれば、もし被害に遭ったら、それぞれどうするかについて、可能な限り具体的な情報も、後半部分に示したところです。性犯罪、特殊詐欺、子どもを狙う犯罪など、身近な犯罪から身を守るヒントを収録しました。

本書のコンセプトが、ビュジュアルを前面に出すものであったため、イラストや図表を豊富に用いて、読み易いよう工夫がなされています。ともすると、堅苦しく深刻な内容となりがちなテーマですが、親しみやすくネガティブにならないようなイラストが、本書全体の特徴となっています。昨年は、台湾にて「打開犯罪：心理学大門」というタイトルで翻訳出版されました。他国の読者が、どのような感想を持って下さるか、ちょっと楽しみにしているところです。

今後も、「齊藤勇記念出版賞」受賞に恥じないよう、エビデンスに基づき、分かりやすく為になる本を執筆していきたいと思います。どうもありがとうございました。



桐生 正幸 (きりゅう・まさゆき) / 1960年 山形県生まれ。文教大学中退、博士(学術)。山形県科学捜査研究所主任研究官、関西国際大学教授を経て、現在、東洋大学社会学部長。神戸学院大学、聖心女子大学など非常勤講師、兵庫県地域安心まちづくり審議委員、日本犯罪心理学会常任理事、日本カスタマーハラスメント対応協会理事。クローズアップ現代+、スイス国営放送など出演。

## 雑学心理学 人はリーダーの何を見て評価しているのか?

森下 雄輔

(帝塚山大学)



人は「上司」、「指導者」、「リーダー」と呼ばれる存在を認識し、その良し悪しについて評価を下すことがあります。例えば、身近な上司が「良い上司なのか?」や、スポーツチームの監督が「名将」と呼ばれ、その指導方法に関する書籍が出版され、ベストセラーになったりもします。では、人はリーダーの何を見て、その良し悪しを判断しているのでしょうか。Lord & Maher (1991) は、リーダーシップに関する認知過程を統合し、身近に関わることの多いリーダーと、関わりが薄い(関わることがない)リーダーを評価するプロセスが異なると説明しています。

身近に関わることの多いリーダーを評価する際には、普段の対人関係の流れからリーダーシップ認知を形成します。人と人が社会的相互作用を行っている状況では、様々な情報が入り乱れるため、対人認知を行う人には高い情報処理能力が要求されます。その一方で、今まさに目の前にいる人が「良い人であるのか」、それとも「自身に悪影響を及ぼす人」であるのかの判断は早急に行う必要があります。そのため、リーダー・プロトタイプ像 (leader-prototype) と実際のリーダーを比較することで評価するという自動的な情報処理過程が用いられることになります。この処理過程をLordらは再認過程 (recognition-based processing) と呼んでいます。つまり、目の前にいるリーダーの「特性」や「行動」から、自身のもつ「リーダーとはこういう人物である」という個人的にもつリーダー像とを比較して認知します。そして、自身のもつリーダーのイメージに合致した人物を、良いリーダーであると評価します。

一方で、自身と関わることのないリーダーを評

価する際には、そのリーダーの人柄や、事細かな行動を知ることができません。そのため、人は一般に知ることができる出来事や、その結果からリーダーの良し悪しを推測します。つまり、「優れた業績をあげた集団のリーダーは優れている」といった、結果から推測するというプロセスを経てリーダーを判断することになります。この処理過程をLordらは推論過程 (inferential processing) と呼んでいます。この推論過程が生じるのは、人が「リーダーは集団の成果に対して影響力をもっている」という認識が存在しているためです。つまり、何らかの集団成果が得られた際に、その成果にはリーダーが関わっていると思い、人は積極的にリーダーシップを認識しようとします。

このように、身近なリーダーに対して、実際の関わりの中で得られた、リーダーの「特性」や「行動」という情報を基に、評価を行います。一方で、関わりが薄いリーダーを評価する際には、それらの材料を得ることができないため、集団に起こった「出来事」や集団の「結果」を評価材料にします。そのため、最前線にいるスポーツチームが勝っている間は「○○監督は名将だ!」と言っていたのに、負けが込むと「○○監督は退任させろ!」などと評価が一転することもあります。

---

森下 雄輔 (もりした・ゆうすけ) / 2017年、帝塚山大学大学院心理科学研究科修了、博士 (心理学)。現在、帝塚山大学研究員・非常勤講師。研究テーマは「フォロワーが行うリーダー評価が集団適応に与える影響」。

# 心理学検定について

**小林 剛史**  
(文京学院大学)



心理学検定は、令和2年度はコロナ禍により実施が叶わず、令和3年度、その実施方法を抜本的に変更しました。いわゆる、Computer Based Testing (CBT) を採用しました。この変更のきっかけとしては、コロナ禍が最大のものですが、本質的な背景としては、受検者が5000人を超える全国規模のものとなった昨今の心理学検定の状況があります。すなわち、CBT化はもはや不可避であり、遅かれ早かれ導入しなければなりませんでした。コロナ禍でそれが早まった、という解釈は成り立つかもしれません。心理学検定局の運営委員総出動でこのCBT化に備えて抜本的改革を進め、2021年度の第14回心理学検定を行うことができました。同検定の総配信数(受検者数に代わり、このように呼ぶようになります)は、お陰様をもちまして6000を越えました。今後、心理学検定の受検者数はより増加することを期待しています。ご協力いただいた方々に心から感謝申しあげます。

一方、受検者の皆様にご不便をもたらすような課題も明らかになりました。まずは団体受検で金銭の扱いを学校法人の教職員にお任せしなければならなかつたことです。多くの大学法人では、学生と教員間の直接の金銭の受け渡しを禁止しており、教職員が受検料を学生から徴収して団体受検を申し込むシステムには障壁があります。これはアウトソースする業者の団体受検のためのバウチャーシステムに依るところが大きいのですが、第15回大会からこのシステムを変更しました。ホームページから団体受検の代表者として申し込みいただくと、心理学検定局から電子バウチャーをお届けします。代表者の方は、この電子バウ

チャー、すなわち割引コードを受検者である学生のみなさんに配布していただくのみで団体受検が可能となりました。これにより、これまでで最も簡便な形で団体受検が可能となりました。昨年度と同様の一括申し込みの手続きも可能です。第14回心理学検定で団体受検を断念せざるを得なかつた学校法人の皆様には、ぜひ改めて団体受検をご検討いただきたく、お願い申しあげます。第2に会場の問題です。全国のCBT会場は国内約160カ所あり、当初は潤沢な受検環境と想定していました。しかし、地域によっては、会場が受検期間の1ヶ月のうち、オープンしていない期間が長く、受検者の都合になかなか合わせることができない事態も報告されています。2022年度より、受検期間を延ばすなどの工夫を講じて参ります。

2021年度は心理学検定にとって変革の年でした。今後、受検者の方々の利便性をより高めるべく、一層努力して参りたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

---

**小林 剛史(こばやし・たけふみ)**／文京学院大学・大学院教授。専門は生理心理学、行動薬理学、認知心理学、神経科学。筑波大学大学院心理学研究科心理学専攻博士課程修了。博士(心理学)。筑波大学助手、文京学院大学人間学部准教授を経て2015年より現職。法政大学非常勤講師、東洋大学非常勤講師、産業技術総合研究所客員研究員歴任。白百合女子大学非常勤講師、東京成徳大学非常勤講師。「におい・かおり」を介した感情・記憶・認知機能の研究を主に研究している。心理学諸学会連合心理学検定常任運営委員。におい・かおり環境協会学会運営委員副委員長。

# 第15回 心理学検定

心理学の基礎知識を身につける。  
実力を試す。



Twitterで  
最新情報配信中



詳細は  
ホームページで

## 2022 07.19.火 ▶ 08.31.水

ご都合の良い日時を選んで、会場でコンピュータを用いて解答する CBT 形式の試験です。

### 全国 47 都道府県で受検可能！

#### 出題科目

#### 予約開始日

**A 領域** 【原理・研究法・歴史】【学習・認知・知覚】  
【発達・教育】【社会・感情・性格】【臨床・障害】

2022年 5月 21 日 土 より

**B 領域** 【神経・生理】【統計・測定・評価】  
【産業・組織】【健康・福祉】【犯罪・非行】

#### お問い合わせ

#### 資格認定

**特1級** A領域5科目・B領域5科目全10科目の合格者

**1級** A領域4科目を含む合計6科目以上の合格者  
(申請による)

**2級** A領域2科目を含む合計3科目以上の合格者

一般社団法人 日本心理学諸学会連合 心理学検定局

〒113-0033 東京都文京区本郷5-26-5-901  
E-mail: info@jupaken.jp Fax: 03-3830-0303

#### POINT

- ◎ 級は合格科目的累積で認定されます。合格科目は5年間有効です。
- ◎ 日本心理学会「認定心理士」の資格保有者は、A領域3科目に合格すれば、「心理学検定1級」を取得できます。
- ◎ 資格は更新制ではなく、生涯有効です。

#### 受検料

受検科目	一般	団体※(20名以上)
A領域(5科目/100分)	¥7,700	¥6,600
B領域(5科目/100分)	¥7,700	¥6,600
A+B領域※ (5科目/100分)+(5科目/100分)	¥12,100 (3,300円お得！)	¥9,900 (3,300円お得！)

※5/9～6/30までに申請してください。



一問一答形式の  
問題集！

公式問題集 &  
基本キーワードも  
発売中！

心理学を極める人も。

心理学を始める人も。

全10科目で幅広い心理学の基礎知識を測定する、  
学術団体が直接行っている信頼できる検定です。

心理学の扉をたたいてみませんか？

日本心理学諸学会連合(日心連)は、56の心理学関係の学会が  
加盟する団体で、日本における心理学ワールドの統合と  
発展を目指して、活動を続けています。



一般社団法人日本心理学諸学会連合  
心理学検定

<https://jupaken.jp/>

↑お申し込みはこちら。今すぐ詳細を確認！

**1**

## 国際交流委員会

**川本 利恵子** (湘南医療大学)

第7期理事体制においては川本を委員長として、相羽美幸（東洋学園大学）、来田宣幸（京都工芸繊維大学）、高石光一（亜細亜大学）、山本勝則（天使大学）の4名の先生方に委員を嘱託し活動中です。

今期の大きな仕事は、国際応用心理学会（ICAP 2023）にて発表された先生方の研究報告を英文特集号として刊行する準備をおこなっています。

この他に、国際交流に関する事業も当委員会の活動の範疇となります。学会活動のさらなる活性化を目指して、積極的な取り組みも視野に入れて活動をしていきたいと考えています。会員の皆様におかれましては、何か良いアイデアや情報等がございましたときには、当委員会までお寄せくださいますと幸いです。

(かわもと りえこ)

**2**

## 齊藤勇記念出版賞選考委員会

**川本 利恵子** (湘南医療大学)

齊藤勇記念出版賞へのご推薦をお願いいたします。この賞は、本学会名誉会員の齊藤勇先生の趣旨および基金により平成27（2015）年4月より施行されている出版賞です。本学会の会員により、応用心理学や心理学のテーマを、心理学を専門としない一般の方々にわかりやすく書かれた書籍とその著者を表彰することを目的としています。出版賞の対象書籍は、本学会会員による推薦（他薦・自薦）により、選考委員会で検討され、常任理事会にて決定されます。出版された当該年度（4月1日～翌年3月31日）の書籍について、原則単著、当該年度内に1冊としています。出版された次年度の年次総会において、賞が授与されます。基金より副賞（金3万円）が贈られます。

2020年度として、2021年3月に一般会員から推薦書が提出されました。選考委員会および常任理事会にて検討され、受賞が決まりました。ご紹介いたします。

**著書名：悪いヤツらは何を考えているのか－ゼロからわかる犯罪心理学入門－**

**著者名：桐生正幸 発行所：SBクリエイティブ 発行年月日：2020年7月**

著書の内容は、第1部は犯罪心理学の基礎知識について、犯罪とはどのようにして起きるのか？ 犯罪者の心理とは？ そして犯罪者はどのように追い詰められるのか（捜査の実際）などのテーマをとりあげています。第2部は最新の犯罪傾向と防犯テクニックについて性犯罪、ストーカー犯罪、子どもを狙った犯罪など4つの犯罪について、最新傾向をまとめています。

以上、会員の皆様も、ぜひご一読ください。（かわもと りえこ）

# 3

## 機関誌編集委員会

上瀬 由美子（立正大学）

2021年4月から3年間の任期で機関誌編集委員長を拝命いたしました。歴史ある『応用心理学研究』の編集作業ということで、重責を感じながらの1年でしたが、幹部副委員長と編集委員の皆さんに支えていただき、無事に47巻1～3号を発行することができました。また、会員の方々には前年度よりも活発に論文投稿を行なっていただき、査読の過程では非会員の先生方にもご協力を仰ぎました。関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

今年度は、新たな取り組みのひとつとして、審査の過程で倫理的配慮に関する記述の要請を統一しました。近年、心理学領域では研究実施に関する倫理的配慮が強く求められております。『応用心理学研究』ではこれまでも投稿倫理規程の中で当該事項の記述を求めていましたが、今期からはより厳密に記述がなされるよう、審査の中で細かなお願いをする場合がございます旨ご理解いただければ幸いです。

編集委員長になって改めて感じることは、日本応用心理学会の裾野の広さです。領域の多様性だけでなく、会員が研究を行う場も様々であり、このことが機関誌においてもバラエティに富む論文の掲載として現れています。編集委員会では日々、『応用心理学研究』が学術誌としての質を保ちながら、会員の皆様の多様な研究活動を支える場となるよう、力を注いでおります。積極的なご投稿をお待ち申し上げます。

（かみせ ゆみこ）

# 4

## 学会活性・研究支援委員会

田中 堅一郎（日本大学）

本年度から、当委員会は私（田中）が委員長を担当することとなりました。当委員会は、外島 裕先生（副委員長、日本大学名誉教授）を始め、稲葉 隆先生（日本カラーデザイン研究所）、小林敦子先生（川越市男女共同参画審議会）、種ヶ嶋尚志先生（日本大学スポーツ科学部）、和田万紀先生（日本大学法学部）の委員で構成されます。

### 1. 若手会員研究奨励賞について

当学会での若手会員研究奨励賞は2016年度から過去4名受賞されましたが、2019年度および2020年度では応募者はいましたが、該当者がいませんでした。昨年度から応募規定の改定が提言されていましたので、本年度応募規定を改定しました。応募規定の改定内容は、以下の通りです：

改定前	改定後
<p>（応募資格）</p> <p>第3条 研究奨励賞応募の資格は以下の条件すべてを満たす者とする。ただし、日本学術振興会特別研究員、または大学、研究機関、企業等で常勤職にある者は応募資格を有しない。</p> <p>(1) 募集年度の4月1日時点で30歳以下の者。</p>	<p>（応募資格）</p> <p>第3条 研究奨励賞応募の資格は以下の(1)もしくは(2)を満たし、(3)に該当する者とする。</p> <p>(1) 本学会の院生会員で当該年度の会費を納めている者。ただし、推薦人1名（正会員）が必要。</p>

- (2) 本学会の院生会員で当該年度の会費を納めてい  
る者。
- (3) 発表された学術論文（単著または筆頭著者に限る）  
または学会発表（責任発表者に限る）の研究業績  
を持つ者。

- (2) 本学会の一般会員で当該年度の会費を納めてお  
り、募集年度の4月1日時点で40歳以下もしくは  
最終学歴修了後5年以内の者。
- (3) 学会発表（責任発表者に限る）または発表された  
学術論文（単著または共著者）の研究業績を持つ者。

まず当委員会では、「若手会員」を年齢に関係なく研究の入り口に立つ初学者を意味するとみなしました。したがって、もし従前以上に多くの申請があった場合には、より初学者に相当する申請者を（業績的、審査基準の上で優れた）経験者よりも優先することが確認されました。また、「募集・選抜方法」について、審査期間を考えると予備審査は行わないこととし、以下のように改定されました。

改定前	改定後
<p>(募集・選抜方法)</p> <p>第4条</p> <p>3 応募者は所定の書式による研究計画書と研究業績 1点を提出するものとし、予備審査として機関誌編 集委員会部門別編集委員による評価を受ける。</p> <p>4 選考委員会は、予備審査の評価結果を踏まえ、優 れた研究計画書を提出した応募者を受賞候補者とし て選考し、常任委員会に推薦する。</p> <p>5 選考委員会により推薦された候補者は、常任理事 会および理事会の承認を得た後、受賞者として決定 される。</p>	<p>(募集・選抜方法)</p> <p>第4条</p> <p>3 応募者は所定の書式による研究計画書と研究業績 1点を提出するものとする。</p> <p>4 選考委員会は、優れた研究計画書を提出した応募 者を受賞候補者として選考し、常任委員会に推薦 する。</p> <p>5 選考委員会により推薦された候補者は、常任理事 会の承認を得た後、受賞者として決定される。</p>

審査（評価）基準について、申請者の将来の発展可能性を強調した以下の改定案が了承されました。

改定前	改定後
<p>研究課題の学術的重要性・妥当性（「研究目的」欄など） 学術的に見て、推進すべき重要な研究課題であるか。</p>	<p>研究課題の学術的重要性・妥当性（「研究目的」欄など） 学術的に見て、<u>将来の発展が期待できる</u>推進すべき 重要な研究課題であるか。</p>

審査方法については、当学会機関誌『応用心理学研究』の部門別編集委員制度がなくなることから、以下のように改定されました。

改定前	改定後
<p>予備審査には応募者自身が申請した研究課題の内容 に応じて、機関誌編集委員会部門別編集委員2名が当 たる。3月○○日に開催される選考委員会において、最 終選考が行われる。選考委員会の構成は、学会活性・ 研究支援委員会委員長の他、常任理事2名、委員長指 名による委員1名の合計4名とする。</p>	<p>選考委員会において、応募者自身が申請した研究課 題の内容に応じて、機関誌編集委員会編集委員2名、 学会活性・研究支援委員会委員長の他、常任理事2名 の合計5名が当たる。</p>

予備審査をなくすことを想定し、以下のような審査過程案が了承されました。

改定前	改定後
<p>告示時期：常任理事会承認後より 募集期間：11月末まで（当日消印有効）</p>	<p>告示時期：常任理事会承認後より 募集期間：11月末まで（当日消印有効）</p>

<p><b>選考期間</b></p> <p>12月～1月末：予備審査</p> <p>12月～2月末：選考委員会審査 ～3月：常任理事会に推薦</p> <p><b>最終選考報告</b></p> <p>常任理事会審議後、3月（受賞者、研究題目名発表）</p>	<p><b>選考期間</b></p> <p>12月～2月末：選考委員会審査 ～3月：常任理事会に推薦</p> <p><b>最終選考報告</b></p> <p>常任理事会審議後、3月（受賞者、研究題目名発表）</p>
---	---

本年度の若手会員研究奨励賞には2名の応募者があり、審査員による審議の結果、2名が採択となりましたが、このうち1名が審査後に辞退されました。以上のことを常任理事会に報告し、審議の結果、以下の1名に若手会員研究奨励賞が授与されることとなりました：

- ・横井川美佳（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）

#### 研究課題名：発達に支援が必要な子どもたちとのポジティブな経験の重要性

今年度は応募資格を改定して応募範囲を広げましたが、応募者数はわずか2件でした。過去2年間受賞者が出ていなかったことを考えると、応募者なし・受賞者なしという事態は避けることができましたが、応募者が少ないとこには変わりありません。前述のように、若手会員研究奨励賞の応募範囲を拡げ、審査過程も簡素化しましたので、応募該当の皆様は奮って応募してください。また、もし一度応募して選ばれなかったとしても、改めて4つの観点から研究計画を練り上げて、チャンスがある限りチャレンジして頂きたいと思います。多くの会員の方の応募をお待ちしております。また、COVID-19の影響が続く中、心理学のように人を対象とする研究が必須な領域では、予定していた研究も実施できなくなる、あるいは計画変更を余儀なくされることもあると思います。学会といたしましても、会員の皆様の研究活性のためできることを探っていく所存です。

## 2. 応用心理士の上級資格設置について

前年度まで継続審議となっていた応用心理士の上級資格設置について当該委員会で再び審議することとしました。

現時点では、職場への応用心理士活用促進のために、上級資格設置を進めるべきである、という意見があるものの、上級資格設置について委員から以下の意見が示されました：①上級資格設置のために心理学の応用領域をどこまで考えるかについての共通認識が必要である。②これまでの応用心理士の役割や設置主旨が（資格独占でないため）分かりにくく。③現在の（応用心理士）有資格者が自分の資格についてどう考えているか、どのような活動をしているか調査すべきである。④日本心理学会における「認定心理士会」のような、「応用心理士会」（仮称）を設置してはどうか。⑤学会員以外でも、応用心理学に関して貢献のあった実務家や研究者を、応用心理士として認定できるようにしてもよいのではないか。⑥上級資格を論功行賞のような位置づけにすべきではない。⑦上級資格を設置するためには、応用心理士資格者を増やし、さらには学会員も増加させるべきである。

当委員会では次年度も引き続き、上級資格について論議する予定です。（たなか けんいちろう）

## 5

**広報委員会****谷口 淳一 (帝塚山大学)**

これまで広報委員会は長年にわたって田中真介委員長（現副理事長）のリーダーシップのもと、「応用心理学のクロスロード」の編集と発刊を行ってきました。充実したコンテンツの数々を昨年までは一読者として楽しみにしていました。その広報委員会の体制が2021年度より変わり、私が広報委員長という大役を任されることになりました。これまでの「クロスロード」を改めて見直し、このようなものが果たして作れるのかという不安な気持ちでのスタートとなりました。

まずは広報委員の選出から始めました。副委員長として森泉慎吾先生（帝塚山大学）、委員として吉澤寛之先生（岐阜大学）、谷田林士先生（大正大学）、古谷嘉一郎先生（北海学園大学）、森下雄輔先生（帝塚山大学）の5名に加わって頂きました。全員がこれまでこのような広報活動には関わったこともなかったですが、委員長の無理なお願いに二つ返事で引き受けさせて下さいました。

7月に開催した第1回編集委員会では、様々なアイデアが出され、それを実現できれば面白く、新しい形の「クロスロード」が出来上がるのではという期待が膨らみました。ただ、前委員長より詳細な引き継ぎをして頂いたものの、クロスロードの作成に携わるのはいかんせん初めてであり、どのように進めてよいのかが分からぬまま時間だけが過ぎ、何より委員長の怠惰で作業が何かと先送りになってしましました。そこで、第14号については第13号までの企画コンテンツに沿った形で作成することにしました。しかし、その後も作業は遅々として進まず、執筆依頼も大変遅くなってしまいました。執筆頂いた先生方には短い期間での執筆をお願いすることになり、この場を借りて改めてお詫び申し上げます。結果として、第14号の発行が例年より大幅に遅くなってしまい、「クロスロード」の発行を楽しみにしていた会員の皆様にも大変ご迷惑をおかけいたしました。

第15号については新たな企画も入れながら、執筆頂く先生方にも無理のない期限で執筆頂けるよう努力したいと思いますので、執筆依頼をした際にはご快諾頂けるとありがたいです。（たにぐち ジュンイチ）

## 6

**企画委員会****桐生 正幸 (東洋大学)**

今期の企画委員は、桐生正幸（東洋大学）、上市秀雄（筑波大学）、小島理江（名古屋大学）、島田恭子（東洋大学・社ココロバランス研究所）の4名のメンバーにて運営を致しました。実施した企画は、「学会研修会」と「公開シンポジウム」の2つです。

**1. 学会研修会**

コロナウイルス感染症の影響により、第87回学会大会（東北文教大学）はリモート開催となりました。それに伴い、学会研修会も大会Webサイトによるオンライン実施となりました。そして、自由な視聴が可能なオンラインの利点を生かし、今回、研修内容を4題に増やしたところです。各講師は、各分野における新進気鋭の研究者です。

研修会Aは、8月28日（土）に配信されました。

- ①講師：小嶋理江（名古屋大学）　題目：「交通心理への研究アプローチ」  
②講師：小野洋平（駒澤大学）　題目：「科学的犯罪捜査への眼球運動の応用」  
研修会Bは、8月29日（日）に配信されました。  
③講師：染矢瑞枝（一般社団法人ココロバランス研究所）　題目：「心理学研究のビジュアル化テクニック」  
④講師：入山 茂（東洋大学）　題目：「空港を取り巻く犯罪」

## 2. 公開シンポジウム

前期、コロナウイルス感染症の影響にて開催が出来なかった公開シンポジウムでしたが、今期は感染者数が減少したタイミングで、無事、開催することが出来ました。

テーマは、「カスタマーハラスマント－心理学的アプローチの可能性を探る－」であり、以下のような実施となりました。

- ・企画趣旨：大きな社会問題となっているカスタマーハラスマントに対し、クレームタイプの多様化、悪質性判別の困難さ、手段の潜在化などにより、従来の方法では対処しきれない状況となり、新たな対応の構築が迫られている。今回、最前線でこの問題に取り組んでいる方々をお招きし、応用心理学による社会実装を検討する。
- ・開催日時：2021.12.11、13：30～16：30
- ・開催場所：東洋大学 白山キャンパス 1号館（1102教室）
- ・司会 小嶋理江先生（名古屋大学）  
理事長のご挨拶：古屋 健先生  
話題提供者 桐生正幸（東洋大学）、安藤賢太（UAゼンセン）、近藤 修（日本対応進化研究会）、阿部光弘（三井住友海上火災保険株式会社）、島田恭子（東洋大学・社ココロバランス研究所）  
宮中大介（慶應義塾大学・株ベターオプションズ）  
指定討論者 上市秀雄（筑波大学）

## 3. 感想と今後について

今期から、前任の臼井伸之介先生よりこの企画委員会を引き継がせていただきました。

生來の段取りの悪さと多動気味の性格ゆえ、学会事務局のみなさまや各メンバーには、ご迷惑ばかりお掛けした一年でしたが、おかげさまで（ほぼ）無事に乗り切れたところです。本当にありがとうございました。

次年度以降は、企画委員の各先生より公開シンポジウムの企画運営を進めていただく予定です。（2022年度は小嶋先生。どうぞよろしくお願ひいたします！）

応心会員の皆様には、講師や話題提供のご依頼などお願いすることになるかと思います。その際には、ぜひともご協力お願ひいたします。（きりう まさゆき）

7

## 倫理委員会

田中 真介（京都大学）

新緑の季節、いかがお過ごしでしょうか。今期の倫理委員会は、大坊郁夫、蓮花一己、外島裕と田中の4名の委員でスタートしました。会員のみなさんの研究を、倫理的な配慮の面からサポートしていくため

の基礎的な支援活動を行っています。

社会の実践現場の研究を進めていく上では、研究対象となった人たちを大切にして理解を深めていくことによって、得られたデータの信頼性も高まり、よりよい研究に育っていきますね。会員のみなさんと一緒に、子どもたちや保護者の方々を含めた研究の対象理解を深め、研究の方法論を洗練していくような活動を構想し、研究実践を支えていきたいと考えています。

応心の多彩な分野の研究活動を、研究倫理の面から支えていくことによって、それぞれの会員の方々が、ご自身の研究の価値を新たに発見して、大事に育てていってくださる一助となるようがんばりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

2018年度には「臨床研究法」などの法制度も新たに整えられ始めて、「人を対象とする研究」についても、丁寧な倫理的な配慮の必要性と具体的な内容が提起されてきました。

(参考) <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000163417.html>

例えば、①「未成年」者を対象とする調査研究などでは、保護者の同意とともに、小中学生や高校生・大学生にも丁寧でわかりやすい説明と同意（インフォームド・アセント）が必要となってきているようです。

また、②「成年」（成人）の年齢が、2022年4月から「18歳以上」となりましたね。そのような制度変更に合わせた対応も必要となっています（例：18歳以上であれば、研究参加者になる場合、保護者の同意は不要となりました）。

(参考) <https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201808/2.html>

会員のみなさんの大学や研究・実践の場でも、倫理的な配慮が大事にされていることだと思います。在籍されている職場で尊重されている「倫理綱領」や、具体的な「倫理規程」についての資料を、応心事務局あてに資料提供していただければありがとうございます。応心の研究支援のための参考資料集として集約していかなければと思っています。（たなか しんすけ）

## 8

# 事務局だより

## 軽部 幸浩（日本大学）

日本応用心理学会事務局では、会員の皆様からの問合せや新入会員の受付など、さまざまな事務処理を一手に引き受けています。その事務処理の大部分は、業務委託を締結した株式会社国際ビジネス研究センター（International Business Institute Co ; IBI）にお願いしています。時代のニーズから「心理学」が注目を集めて、30年近く経過しましたが、依然とその人気は衰えていません。わが国の応用心理学的活動は1920年ころからすでに芽生えていましたが、その当時は実験・基礎の研究が中心でした。そのような中で、日本応用心理学会は、心理学の研究が社会の具体的な問題解決に資することを目指し、広い専門領域の研究者が集まり1936年に設立されました。このように伝統のある学会において2021年4月より新理事体制の下、事務局長を拝命しました。微力ながら、会員の皆様へのサービス向上と応用心理学の普及に少しでも役立つことができれば幸いと考えています。そこで、会員の皆様におかれましては、お気づきのことがございましたら、どうかご遠慮なく学会Webサイトに用意してある「お問い合わせ」に忌憚のないご意見やご要望をお送りください。できるだけ皆様方のご意見やご要望を反映し、より一層の素晴らしい学会にしたいと考えています。何卒、よろしくお願ひ申し上げます。（かるべ ゆきひろ）

## 今年度の委員会活動について 学会賞選考委員会

木村 友昭（一般財団法人 MOA健康科学センター）

前期に引き続き、学会賞選考委員会の委員長を拝命いたしました。委員会は、男女両性、そして幅広い年代で構成され、私のような大学に所属していない者が加わるなど、多様性のある委員会になっています。

本委員会の役割は、機関誌「応用心理学研究」に掲載された論文の中から学会賞（論文賞と奨励賞）を選考することと、大会での研究発表の中から優秀大会発表賞を選考することです。委員会の選考結果を常任理事会に報告し、十分な審議を経て決定されます。学会賞は、理事・監事の先生方の推薦をもとに選考します。一方、優秀大会発表賞は、大会に参加された会員の皆さまの推薦をもとに選考いたします。

今年度は、初めてのWEB開催となりました。これまでの大会では、会場で投票用紙を配布し、投票箱に投函していただく方法で実施していました。WEB開催では、このようなアナログなやり方は不可能ですので、電磁的方法を採用することになりました。電子メールで投票用紙を送信してもらう方法や大会ホームページに投票ボタンを設置する方法なども考えましたが、アンケート調査などで使用されているGoogleフォームを使用することに決めました。大学のオンライン講義などでも使用されており、会員の皆さんにもなじみがあるのでと、考えました。これまででは、「優秀大会発表賞の投票をお願いします」と声をかけていましたが、オンラインではできません。果たして投票が集まるのだろうかと不安がありましたが、結果的には例年通りの投票をいただき、優秀大会発表賞の選考を無事に行うことができました。改めて、投票していただいた会員の皆さまに御礼申し上げます。また、今年度、投票されなかつた皆さまは、来年度（京都大会）はぜひ投票をお願いいたします。（きむら ともあき）

## 学会史編纂委員会

委員長 古屋 健（理事長）・委員 軽部 幸浩、藤田 主一

日本応用心理学会「学会史編纂委員会」（以下、本学会、本委員会）は、2016（平成28）年度より理事長直轄の委員会として新しく発足いたしました。したがいまして、本委員会は今後とも理事長が委員長を兼務することになります。なぜならば、本委員会の活動は本学会だけでなく、わが国の心理学界全体に関係する極めて重要な作業を伴いますので、本学会の代表者である理事長が委員長になっております。

1年前の常任理事会通信（『応用心理学のクロスロード』No.13）の「委員会報告」において、本委員会活動紹介の最後に「残念なことに、本年度はコロナ禍の影響が収束に向かわないと、インタビューの継続が叶わないまま時間が経過しています。お約束しておりますのに、まだ実現できない名誉会員の先生には大変申し訳ございません。もう少しあ待ちください」と記載されています。この文言の背景は、本委員会活動の大きな目的の1つに「名誉会員インタビュー」が企画されていることによります。本学会の発展にご貢献くださった先生方に直接インタビューすることで、先生方の本学会でのご活動やご自身のご研究、また会員の皆様方や今後の心理学界へのご提言などについて、貴重なお話を伺いできると思うのです。しかし、誠に残念ながら、1年が経過したにも関わらず、コロナ禍は一向に収束せずに過ぎてしまいました。以前よりご予定させていただいた名誉会員の先生方には、大変申し訳なくお詫び申し上げます。本年度は、ぜひお目にかかり有意義なお話を聞かせいただき、本学会の歴史の中に刻み入れたいと思います。

本学会の歴史を振り返えれば、本学会は日本心理学会（1927年設立）と並んで長い歴史と伝統を有しています。本学会の正式な発足をいつの年月にするのかについては、諸説があります。その歴史をさかのぼると、東京在住の心理学者が中心となり1931年6月に「応用心理学会」が誕生していますが、これ以前の1927年には、関西において「関西応用心理学会」が立ち上がっており、1934年4月には京都帝国大学で関西と東京の合同大会が開催されています。そして1936年4月の大会より「応用心理学会」に「日本」を冠して、今日の「日本応用心理学会」の名称が確立しました。本学会の発足当初から今日に至るまで、会員の先生方はわが国の心理学界を代表する心理学者のお名前ばかりです。これは本学会の誇りでもありますので、現会員の先生方には今後とも、その一翼を担ってくださいますようお願い申し上げます。

本委員会は、本学会に関係する記録を散逸させないため、また新たな視点で本学会の発展を遠望するために設立されました。近い将来に設立100周年を迎えますので、その節目へ向けてさまざまな準備を開始する必要があります。そのため、本委員会はアーカイブという立場から、本学会の歴史と資料を後世へしっかりと継承するように整備していくことになりました。具体的には、①本学会に関わる資料・史料の蒐集と編纂、②蒐集した成果の公表、③名誉会員へのインタビュー、④『日本応用心理学会100年史』の発行、などを大きな目的にいたしますので、会員の先生方には何とぞご協力くださいますよう、心よりお願い申し上げます。（ふるや たけし・かるべ ゆきひろ・ふじた しゅいち）

## 2021年度日本応用心理学会学会賞

[敬称略、所属は論文掲載当時、順不同]

### 論文賞

「浅い関係で用いられるスキルが行動活性化に与える影響」

田中 圭 (筑波大学大学院 人間総合科学研究科)

沢宮 容子 (筑波大学 人間系)

[掲載雑誌]

『応用心理学研究』 第46巻 第2号, 139-148, 2020

### 奨励賞

「「命てんでんこ」の教えの実践はなぜ難しいのか?

—仮想的な土砂災害ジレンマ状況における感情と理性のギャップ分析—

前田 楓 (安田女子大学大学院)

橋本 博文 (安田女子大学)

[掲載雑誌]

『応用心理学研究』 第46巻 第3号, 271-282, 2021

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込みください。  
このページをコピーし必要事項を記入して、学会事務局宛までご郵送ください。

## 日本応用心理学会入会申込書（一般・院生・学生）注2, 注3

フリガナ	申込年月日 20 年 月 日 推薦者（会員）注6 (印)										
氏名											
ローマ字	性別		男・女								
	生年月日		年 月 日								
現住所	〒_____										
	電話番号	( )									
最終学歴	〔 年 月 〕【在学中のものではなく、卒業あるいは中退・修了について学科名まで】										
所属注4	名称										
	所在地	〒_____	電話番号 _____ ( )								
	職名 現学歴	【職名の場合には年数、院生の場合には課程・専攻、学部の場合には学校名・学年】									
研究領域注5	テーマ										
	原理 医療 統計	学習 犯罪 その他 ( )	認知 社会 文化	感情 産業	教育 交通	発達 災害	人格 スポーツ	臨床 福祉	精神 相談	健康 生理	看護 行動分析
メールアドレス											
備考											

※申込用紙の個人情報は、学会活動や運営上必要な事務連絡、本学会の事業目的達成のため以外に利用されることはありません。

### 記入上の注意

注1. 楷書で正確に記入してください。

注2. 申込書の上部に書かれている会員種別で、希望する会員の種類を○印で囲んでください。

注3. 一般会員、院生会員の入会資格は、会則第4条第2項に次のように定められています。

一般会員、院生会員の入会資格は、次の通りとする。

(1)四年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者

(2)一般社団法人日本心理学諸学会連合が認定する心理学検定1級合格者で22歳以上の者

(3)第1号に準じ常任理事会が認める者

(1)の隣接分野とは以下の分野を指しています。

教育学、児童学、人間関係学、体育学、社会学、社会福祉学、芸術学、宗教学、医学（心身医学、精神医学、行動医学など）、看護学、経営学、認知科学（人口頭脳など）、人間工学、など。

(1)の入会資格に該当しないと判断される場合は、備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴（年数）をできるだけ詳しく書いてください。(2)の入会資格にて入会を申し込まれる場合は心理学検定1級合格証のコピーを添付してください。(3)の第1号に準じるものと認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。後日さらに詳細な資料を求める場合もありますのでご了承ください。

注4. 社会人学生の場合には、在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。

注5. 研究領域は、主な3領域を○印にて囲んでください（3つを超えて○印を付けてもかまいません）。

注6. 推薦者を必ず書き署名・捺印をもらってください。推薦者がいない場合には、理由書を添付してください。

事務局受付 [ ] 審査 [ ] 本人連絡 [ ] 会費納入 [ ]

## 「応用心理士」のご案内

小林 剛史

(「応用心理士」認定審査委員会 委員長)

日本応用心理学会では、学会員で業績のあるものに対し、本人の申請により一定の手続を経て、「応用心理士」の資格認定証を交付しています。

資格認定は、厳重な試験に合格しなければ一定の資格を取得できないものもありますし、心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり、まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一歩進めて、学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること、きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしています。この資格は、個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられています。

「応用心理士」は資格であって免許ではありませんが、これを所持することによって職場における活動は現在よりもさらに拡大され、多くの人びとの承認を受けると思っています。もちろんこの「応用心理士」の資格を取得したからといってなんでもできるわけではありません。人事・労務関係、医療・看護関係、司法矯正関係、交通関係、教育関係、相談関係などの仕事に従事している人が、心理学的な仕事の重要性をわきまえ、十分留意して活動することが必要であると考えています。

「応用心理士」の資格要件をご参照の上、認定審査の申請をされますことをお待ちいたしております。

## 日本応用心理学会認定 「応用心理士」資格認定申請の御案内

「応用心理士」事務局

本誌の「応用心理士の現場」では、応用心理士資格を活かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多趣多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が1人でも多くなりますよう、ぜひ資格の取得をお勧めします。

### 【認定制度の趣旨】

日本応用心理学会では、会員で業績のあるものに対し、本人の希望により一定の手続を経て、標記の「応用心理士」の資格認定証を交付することにいたしました。

現在、いくつかの心理学関係の学会で資格を認定しています。厳重な試験に合格しなければ一定の資格を認定しないところもありますし、心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり、まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一步進めて、学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること、きちんとした業績を持つていることを主要な要件にしました。資格要件の詳細についてはこの手引きのなかに明記されています。この資格は、個人や団体の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられたものです。

### 【資格要件】

学会で認定する「応用心理士」は、会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

資格の要件は、日本応用心理学会認定 「応用心理士」 認定制度による認定資格の基礎的条件として、本学会に入会後満2年を経過し、現在会員であることが必要です。

さらに、次の（1）から（4）のいずれか1つに該当し、応用心理学の専門職としての資質があると認められた人に認定されます。なお、（1）から（4）のいずれかの要件も完全に満たすことができない場合は、該当内容を総合し、判断されます。

- (1) 学校教育法に定められた大学または学院において、心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者（学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む）。
- (2) 本学会機関誌『応用心理学研究』に1件以上の研究論文（共著も含む）を発表した人、または本学会の年次大会において2件以上の研究発表（単独発表または責任発表のもの）をした者。
- (3) 認定審査委員会が応用心理学と関係があると認めた専門職で、3年以上の経験を有する者。
- (4) 応用心理学と関係ある職で3年以上の経験を有し、本学会研修委員会企画の「研修会」に5回以上参加した者（申請時に5回分の「受講証明書」を添付してください）。

### 【資格申請の手続き】

会員で日本応用心理学会認定 「応用心理士」 の資格を得ようとする人は、以下の順序に従って申請の手続をしてください。

[1] 「応用心理士」の資格申請書類をダウンロードしてください（学会ホームページに掲載）。

[2] 申請書類に所要事項を記入し、下記の申請受付期間内に、送付してください。

[3] 審査料（10,000円）は、郵便振替で送金してください。

郵便振替の振込先

口座番号 00110-6-359059

加入者名 日本応用心理学会

※注意：申請書類一式の中に同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

[4] 提出する申請書は次の通りです（提出の際確認してください）。

(1) 様式1（資格認定申請書）

※所定の枠内に証明証用カラー写真（ヨコ35mm、タテ45mm）を貼付してください。

※審査料の振込金受領証をコピーし貼付してください。

(2) 様式2-1（履歴書）

(3) 様式2-2（業績書）

(4) 「研修会」参加を資格要件とする場合は、「受講証明書」5回分を添付してください。

[5] 認定審査委員会では、提出された書類について審査し、結果を文書にて、申請者に通知します。合格した人は認定料（30,000円）を納入してください。入金されると、日本応用心理学会認定 「応用心理士」として認定し認定証を交付します。また、日本応用心理学会認定 「応用心理士」名簿に登録するとともに、本学会機関誌『応用心理学研究』に掲載して公表します。



応用心理士認定書（カード）の見本

### 【申請受付期間】

	【前 期】	【後 期】
申請受付期間	毎年4月1日～6月末日	10月1日～12月末日
審査結果通知	8月上旬	翌年2月上旬
認定料納入日	8月下旬まで	翌年2月下旬まで
認定証の送付	9月下旬	翌年3月下旬

### 【応用心理士事務局】

日本応用心理学会認定 「応用心理士」 事務局

〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町518 司ビル3F

株式会社 国際ビジネス研究センター内

# 広報委員会

谷口 淳一（委員長）

森泉 慎吾（副委員長）

谷田 林士

古谷 嘉一郎

森下 雄輔

吉澤 寛之

# 編集後記

■ やっとクロスロードを皆様のもとにお届けできることに喜びと安堵の気持ちです。発行を心待ちにして下さっていた会員の皆様、このように大変遅くなってしまい重ね重ねお詫び申し上げます。遅くなってしまったが、例年通りの玉稿の数々です。ぜひとも隅から隅までお目通し頂けると幸甚です。執筆して頂いた先生方、本当にありがとうございました。スペシャルなチームを作ろうとの委員長の一存で、大変なお仕事をお引き受け下さった委員の皆様にも感謝申し上げます。委員長のリーダーシップの欠如でご迷惑おかけしておりますが、あと2号の作成、どうぞよろしくお願い致します！（谷口 淳一）

■ 私にとっての「クロスロード」は、これまで幅広く興味深いコンテンツを楽しめる読み物の一つでしたが、谷口委員長より（恐れ多くも…）副委員長を仰せつかり、これからはそれらを作る立場になったことに多少の喜びと大きな不安を感じています。今回の編集作業は、谷口委員長をはじめ、委員の先生方の多大なる尽力により成り立っており、副としてどの程度お役に立てたかは分かりませんが、ようやく会員の皆さまにお届けできることを嬉しく思います。今回も、たくさんの先生方から頂戴した玉稿はどれも読み応えのあるものばかりですので、是非ご一読頂き、会員交流の機会として楽しんで頂ければと思います。（森泉 慎吾）

■ この度、広報委員を仰せつかり、「クロスロード」という雑誌名の意味に思いを巡らすことから始めました。創刊号から脈々と受け継がれていると感じたことは、過去と現在の交差としてのクロスロード。決して岐路ではなく、歴史を知り、過去を懐かしむことと、今を知り、未来にワクワクすることの交差。谷口委員長を筆頭に、他の広報委員の先生たちも、このクロスロードを楽しめる先生方ばかりです。古き良き時代の伝統や価値観を懐古したり、革新的で新たな息吹を感じ取ったりすることができる「クロスロード」となるよう微力ながら尽力いたします。（谷田 林士）

■ クロスロードの編集委員を谷口先生からご依頼されたとき、私など役に立つだろうかと逡巡しつつ、承諾させていただきました。しかしながら、zoomでの編集会議、slackでの諸連絡を通して、谷口先生、編集委員の先生方のご指導の元、なんとかやり遂げることができました。次回も、ご迷惑をおかけすることになるとは思いますが、できる限り努力したいと考えております。さて、今号も多様な内容、そして勢いに満ち溢れています。コロナ禍での学会報告一つとっても、その熱量が伝わってきます。その熱量に答えるため、編集作業も初校から誤脱がないように確認させて頂いたつもりです。加えて、編集後記も気合を入れて書くようにと、谷口先生からご指導いただきました。そのご指導に答えられるように執筆したつもりです。これからも編集委員の仕事が続くことになります。皆様どうぞよろしくお願ひいたします。（古谷 嘉一郎）

■ この度、谷口委員長よりお声がけ頂き、広報委員として「クロスロード」の編集に携わらせて頂きました。しかし、広報誌の編集に携わることは私自身にとって初めての経験であり、本誌の編集にあたっては、谷口委員長や委員の先生方に支えられてばかりでした。掲載されている記事は、多くの先生方にご尽力頂いたものとなっておりますので、是非ご一読頂ければ存じます（私自身も一部の記事を執筆しておりますので、宜しければご笑覧頂けますと幸いです）。今後も委員を務めさせて頂きますので、よろしくお願ひします。（森下 雄輔）

■ はじめて広報委員会の仕事を担当させていただきました。zoomでの編集会議では、とても創発的なアイデアが飛び交い新鮮でした。その後、各メンバーの自由なアイデアを確実に形にしていただいた谷口委員長はじめ委員の先生方の仕事ぶりには感服するのみでした。今回は委員会の中で一番貢献できていませんでしたので、次回に向けて気を引き締めて取りかからうと思っています。少なくとも、委員の先生方の足を引っ張らないように気をつけます。（吉澤 寛之）

表紙写真：「みどりと時計」

2022年4月、  
(撮影：森下雄輔)

## 応用心理学のクロスロード Vol.14

編集・発行 日本応用心理学会

〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町518

司ビル3F

(株)国際ビジネス研究センター内

TEL.03-5273-0473

FAX.03-3203-5964

E-mail j-aap@ibi-japan.co.jp

HP <https://j-aap.jp/>

デザイン 株式会社 杏林舎  
印刷・製本 株式会社 杏林舎

2022年7月31日 発行



# **JAAP**

The Japan Association of Applied Psychology